

下総台地における

加曾利 E III 式期の諸問題

— 集落の成立に関する予察を中心に —

加 納 実

目 次

1. はじめに	107
2. 加曾利EⅢ式土器の諸問題	107
3. 林台遺跡の分析	113
(1) 遺跡の概観	114
(2) 住居跡の様相	118
(3) 住居跡群の様相	122
(4) 林台遺跡の復原	125
(5) 展望	133
4. おわりに	136

1. はじめに

縄文時代中期終末の研究は、土器論上の課題と集落論（社会論）上の課題が多く含まれている。これらは単に加曾利E式後半期という枠組みのなかでの諸問題にとどまらず、前後する時期との関係からも注目されるべき性格を有している。鳥瞰するならば、前段階で頂点をむかえる所謂「環状集落」と呼称される集落の消失や集落規模の縮小化、土器群の様相の急激な変化や、称名寺式土器を成立せしめる複雑な要因等、興味深い多くの課題を挙げることができよう。これらの点を勘案すれば、当該期の研究が土器論上での大別をひとまず払拭したところでの、縄文時代中期から後期へむけての大きな画期としての性格を多分に有していることが窺え、土器論上の立場や集落論上の立場から押し進められてきた個別的研究のより一層の深化と、両者の止揚が進められなければならないと痛感している次第である。よって本稿では、加曾利E III式期の抱える多くの課題のなかから、特にその成立段階の土器群の編年学的研究の課題の抽出と、当該期の集落の成立に関わる問題について言及し、今後の当該期研究の叩き台として提出しておきたい。

2. 加曾利E III式土器の諸問題

筆者の加曾利E III式土器の成立の認識は、横位連携弧線文土器（第13図9・第16図14）の成立を基準に据えている（加納1989a・b 1994）。横位連携弧線文土器・意匠充填系土器（第15図19）の概念や成立過程については旧稿（加納1994）において詳細に述べているのでここでは繰り返さないが、加曾利E III式土器研究の抱える課題のひとつとして、横位連携弧線文土器の出現をもって加曾利E III式土器の成立と捉えた場合⁽¹⁾のキャリパー形土器の弁別基準、即ちキャリパー形土器を如何なる基準を以て加曾利E II/III式土器として分離し得るかという命題がある。この点に関しては旧稿（加納1989b）においてその基準を示したことがある。それらは、

1. 口縁部文様帯と胴部文様帯を区別する明瞭なヨコ一次区画効果（稲田1972）の減少
2. 口縁部主文様（渦巻文）と副文様（区画文）の一体化
3. 胴部懸垂文と口縁部文様の癒着
4. 胴部の懸垂文効果を有する無文部が拡大し、本来“地”の部分であった縄文部に懸垂文効果が移行
5. 懸垂文を描出する沈線が縄文部の上端で連結し、懸垂文効果が完全に縄文部によって描出される。

というものであった。

この基準は横位連携弧線文土器の成立を挟んだところでの、キャリパー形土器の様相の差異としては、今日においても大局的には支持されると確信しているものの⁽²⁾、現実的な適用には多くの困難がつきまとうようである。

例えば、横位連携弧線文土器の成立をもって加曾利EⅢ式土器の成立との立場を堅持する限りにおいては、横位連携弧線文土器を伴出しない一括資料の時間的位置づけに大きな困難をきたすことになる。キャリパー形土器群の一括資料を瞥見すると、加曾利EⅡ式土器的なものと同加曾利EⅢ式土器的なものとの伴出がまま見受けられる。これは、鈴木徳雄氏が述べたような、「共時的な形態変化の振幅が時間的な変化を凌駕する状況」(鈴木1991)にも酷似する。漸移的に変化すると今日的に捉えられる土器群が、今日的な共時性(一括資料)の中において現象してしまうことを、制作時の厳密な差異や、一括資料として現象するまでに費やされる、遺棄・廃棄・流入までの時間幅を介在させ理解することはたやすいが、この理解は「型式」として、時空両軸を今日的に裁断してゆくという原則からはなじまないような気がする。具体的な時間幅である加曾利EⅢ式期(古段階)として、広く関東地方を射程に据え、またこの具体的時間幅に併行する他地域をも射程に据えるならば、まさに今日的に裁断された、研究者間の共通の時間幅としての有効性が優先されるべきであり、個々の遺跡、個々の一括資料の評価に際しては、「概ね横位連携弧線文土器が成立しているであろう段階=加曾利EⅢ式期古段階」とせざるを得ない現状なのではなかろうか。

加曾利EⅢ式土器成立段階の抱える問題のもう一方として、意匠充填系土器の成立段階が挙げられよう。具体的には、横位連携弧線文土器の成立を以て加曾利EⅢ式土器の成立と認識するならば、意匠充填系土器の成立段階が横位連携弧線文土器の成立段階に対応するのか、そうでなければ、加曾利EⅡ式期(新段階)乃至加曾利EⅢ式期(古段階)のどちらであるのかが問われることとなる。筆者は旧稿(加納1994)に於いて、レベルの差こそあれ、対向系横位連携弧線文土器と入組系横位連携弧線文土器の成立に、意匠充填系土器(意匠充填手法)の影響を推し測ったが、この推測が妥当であるならば、意匠充填系土器の成立段階が概ね横位連携弧線文土器の成立段階に対応すると考えて差し支えないと思われる。但し、旧稿でも指摘したとおり、意匠充填系土器には、意匠充填手法の萌芽段階の様相を示すキャリパー形系土器と、萌芽段階を示す個体例に乏しく、整然とした意匠充填手法を採る瓢形の土器群(所謂梶山タイプ)に弁別されることから、一概には扱い得ない。特に前者のキャリパー形系土器については大木8/9式土器との対応関係を含め、慎重な態度が必要であろう。一括資料に注目すると、林台遺跡(井上1989)52住(第13図8~12)では意匠充填手法の萌芽段階の様相を示すキャリパー形系土器(同8)と入組系横位連携弧線文土器(同9)が伴出しており、積極的に時間差を認め得ないところではあるものの、8は口縁部文様帯の渦巻文に顕著なように、渦巻文を前面に

突出させるが如く描出させている点等、東北的色彩が強いことが予想され、頸部に無文帯を有し、渦巻文が突出することのない一群（第11図9・第13図6）とは系譜的・時間的に峻別し得る可能性もあり、現段階では判然としない。また、胴部の形態が、林台遺跡例のようなキャリパー形土器的な直線的なものであるか、第10図2・第11図9のような胴部の張るものであるかの差異にも微妙な系譜・生成過程の差異があるのかもしれない。ともあれ、意匠充填系土器の成立段階が概ね横位連携弧線文土器の成立段階に対応する予測は、積極的に肯・否定するに足りる一括資料が蓄積されていない現状からも、未確定であると言わざるを得ない。

さて、加曾利E III式土器成立段階の問題点を列挙したところで、具体的に下総台地の当該期ではどのような様相を示しているのかを観察し、個別的な課題について述べておきたい⁽⁹⁾。

a. 草刈遺跡（高田1986） 第9図1～第10図8

加曾利E III式期（古段階）に終焉を迎える所謂環状集落である。186号土坑（第10図1～4）は、2・4が土坑底面で伴出し、1・3が底面ピット内で伴出している。但し底面ピットが大型であり、単独の柱穴状の土坑（長軸90cm・深度135cm／土坑の深度75cm＋土坑底面からのピットの深度60cm）の可能性もあることから、土坑に伴う施設であるか否かは確定し得ない。2は意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器である。全体的に加曾利E III式期（古段階）に含むことには躊躇をおぼえる。429号土坑（第10図7・8）の7は加曾利E II式土器であろう。第9図2・3・4等、口縁部文様帯の主文様の渦巻文が、単描線によるポジティブな描出ではなく、縄文地の図形の輪郭線としてネガティブに獲得されている様相は、口縁部文様帯の主文様が、意匠充填系手法の影響のもと、副文様（楕円区画文）と同質化されたもの（単独の意匠として獲得）として捉え得るものであり、キャリパー形土器の弁別におけるひとつの趨勢として抽出し得るものであろう。

本遺跡出土土器群は、構成比に於いてキャリパー形土器が群を抜いて卓越しており、意匠充填系土器は、萌芽段階に相当するもの（第10図2・8）が散見されるものの、加曾利E III式期（古段階）と確定し得ない。横位連携弧線文土器となると、典型例は皆無に等しい。唯一第9図22を入組系横位連携弧線文土器の類似例として捉え得るのみである。

b. 土宇遺跡（新井1979） 第10図9～第11図2

加曾利E II式期（新段階）～加曾利E III式期（古段階）にかけての集落である。集落は弥生時代の集落設営による削平をかなり受けているものの、明瞭な住居跡が20軒であり、おそらく住居であったろう単独の炉跡（8基）の検出を考えあわせれば、本来的な住居跡数は県内当該期集落のなかでも卓越したものであるといえよう。

キャリパー形土器を瞥見すると、第10図9・10は渦巻文起源の浮文効果が顕著で、加曾利E III式期（古段階）に散見される区画文間突起の生成過程を窺わせるような、せりあがる様相を

示している。共に加曾利E III式期（古段階）に含み得ない加曾利E II式期（新段階）であり、第10図12・13は加曾利E III式期（古段階）であろう。土器群の構成比においては、キャリパー形土器が主体を占めるが、瓢形の意匠充填系土器の破片や、横位連携弧線文土器の破片も、包含層を中心に散見される。典型的な入組系横位連携弧線文土器（第10図11）や、意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形土器（第10図14）も出土している。

c. 子和清水貝塚（松戸市教育委員会1978 1985） 第11図3～11

草刈遺跡同様、加曾利E III式期（古段階）に終焉を迎える環状集落である。本遺跡出土土器群は、草刈遺跡同様、構成比に於いてキャリパー形土器が群を抜いて卓越しており、意匠充填系土器は、萌芽段階に相当するもの（第11図9）が散見されるものの、加曾利E III式期（古段階）と確定し得ない。横位連携弧線文土器となると、典型例は皆無に等しい。唯一第11図5を対向系横位連携弧線文土器の類似例として捉え得る⁽⁴⁾のみである。

d. 鎌取遺跡（上守1993） 第11図12～第12図8

加曾利E II式期（新段階）～加曾利E III式期（古段階）にかけての集落である。4号住居跡（第11図12～19）の17は相対的には覆土上層から出土している。土器群の構成比はキャリパー形土器が優位を示すものの、意匠充填系土器も多く認められる。典型的な横位連携弧線文土器は見あたらない。第11図15・第12図2などが横位連携弧線文土器的な様相を示すものとして抽出し得るのみである⁽⁵⁾。

e. 多田遺跡（上守1992） 第15図18～第16図6

加曾利E III式期（古段階）から称名寺期にかけての集落である。キャリパー形土器の安定した存在が目立つようでもある。意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形土器は認められない。9号住居跡（第15図25～29）は、27のような典型的な意匠充填系土器を視座に据えるならば、構成に乱れの生じている26や横位の連携間に紡錘状の意匠を充填する25をも含めたかたちで加曾利E III式期（古段階）として捉えざるを得ないであろう。この一括資料の評価は、多田遺跡20号住居跡（第16図1～6）・中薮遺跡3号住居跡（第16図25～28）・新山台遺跡2号住居跡（第17図1～12）・芳賀輪遺跡134号住居跡（第18図3～10）出土土器群とも絡めて、為されなければならない。即ち、細かな形態的特徴や文様描出技法の差異を払拭したところで、図/地の対照効果に乏しい典型的な意匠充填手法を採る土器群は、概ね加曾利E III式土器（古段階）として捉えるべきであろう。これは、伴出する土器群の生成過程が、概ね意匠充填系土器の沈文化や、横位連携弧線文土器と意匠充填系土器との融合・接触のなかから語り得るものである点⁽⁶⁾と、意匠充填系土器の主文様の単位文化をもって加曾利E III式土器（新段階）として分離される（加納1994）以上、今日的には当該土器群の加曾利E III式土器（古段階）との評価は明確に否定し得ないのではなかろうか。

f. 中薙遺跡（今泉1986） 第16図25～28

加曾利E III式期（古段階）から加曾利E III式期（新段階）にかけての集落である。意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器は認められず、キャリパー形土器は小破片すら見あたらない。このことは、3号住居跡の28が、例えば第12図20・第16図14などとは型式学的に明瞭に分離し得る状況も絡めれば、加曾利E III式期（古段階）の設定に関して何らかの措置が採られるべき可能性を示唆し得るところでもあるが、前述の通り、図／地の対照効果に乏しい典型的な意匠充填手法を採る土器群が概ね加曾利E III式土器（古段階）として捉えるべきであるならば、加曾利E III式期（古段階）の示す時間的振幅が大きい（幅広い）としておかなければならないと同時に、各遺跡毎の様相の差異に、加曾利E III式土器（古段階）の複雑な様相を示す要因が隠されているのかもしれない。

g. 新山台遺跡（岡田1986） 第17図1～12

加曾利E III式期（古段階）から加曾利E III式期（新段階）にかけての集落であるが、キャリパー形土器は認められない。意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器も認められない。2号住居跡出土土器群（第17図1～12）は、中薙遺跡での理解同様、加曾利E III式土器（古段階）として捉えざるを得ないであろう。

h. 中山遺跡（渋谷1987） 第20図6～13

加曾利E II式期（新段階）から加曾利E III式期（古段階）にかけての、微妙な段階の集落である。第20図13のような明瞭な加曾利E III式期（古段階）のキャリパー形土器も出土しているが、意匠充填系土器・意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器・横位連携弧線文土器は全く認められない。連弧文土器が僅かに認められる。

i. 向原遺跡（大原1989） 第20図14～20

加曾利E II式期（新段階）から加曾利E III式期（古段階）にかけての、微妙な段階の集落である。包含層中には明瞭な加曾利E III式期（古段階）のキャリパー形土器が出土している。更に、包含層中には意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器の破片が僅かに認められ、連弧文土器がやや多く散見され、横位連携弧線文土器・意匠充填系土器は全く認められない。

各遺跡の土器群の様相を鳥瞰してみたが、先述の、“概ね横位連携弧線文土器が成立しているであろう段階＝加曾利E III式期古段階”と捉え、尚且つ、図／地の対照効果に欠ける典型的な意匠充填系土器群をも概ね加曾利E III式期（古段階）として捉えるならば、草刈遺跡・子和清水貝塚等、所謂環状集落と呼称される集落の終焉期（加曾利E III式期古段階）では、キャリパー形土器が量的に卓越し、横位連携弧線文土器の典型例や意匠充填系土器は認められず、意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器が散見されるという傾向を、下総台地では抽出し得るのではなかろうか。また、土宇遺跡や後述する林台遺跡等は、キャリパー形土器の量的優性

の傾向は認められるものの、意匠充填系土器・意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器・横位連携弧線文土器等が散見されるという傾向を有している。これとは別に、長田雉子ヶ原遺跡・中籬遺跡等、典型的な意匠充填系土器が安定しながらも、キャリパー形土器が全く認められない集落も存在する⁽⁷⁾。また、キャリパー形土器から導き出されるところの加曽利EⅡ式期(新段階)／加曽利EⅢ式期(古段階)と意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形系土器との構成比も、中山遺跡と向原遺跡での様相から、連弧文土器を絡めたところでも遺跡毎の差異がありそうである。将来的にはこの遺跡毎の系統的構成比の差異が問われることになるであろうが⁽⁸⁾、現段階で認識しておかなければならない点について触れておきたい。

キャリパー形土器の型式学的差異をもって加曽利EⅡ式期(新段階)／加曽利EⅢ式期(古段階)を厳密に弁別し得ないという現状と、横位連携弧線文土器の成立を以て加曽利EⅢ式土器の成立と認識する現状と、この成立段階の様式論的把握が各遺跡・各一括資料の評価に一定の困難がつきまとうという性格から、“概ね横位連携弧線文土器が成立しているであろう段階＝加曽利EⅢ式期古段階”とせざるを得ない現状については前述した。例えば、この視点に、地の対照効果に欠ける典型的な意匠充填系土器群をも概ね加曽利EⅢ式期(古段階)として捉えるという視点を絡めたところで加曽利EⅢ式期(古段階)という時間幅が策定されるならば、この規定性を軸に、個別の資料を評価して行くと、具体的な一括資料の有する具体的な時間幅の両端が相互にずれ、尚且つ相互に部分的に交差(併行)し、この具体的な一括資料の統合的評価である概念化(型式として今日的に裁断してゆく)を行う際、結果として、加曽利EⅢ式期(古段階)という時間幅が広く採られてしまっている可能性(危惧)を認識しておかなければならないのではなかろうか。つまり加曽利EⅢ式土器の細分に際しては、細分自体の可能性の当否をも含めて、方法論的に再考の余地が多く残されている可能性を認識しておかなければならない。

最後に、筆者の加曽利E式土器後半期の細分案(加納1989a・b)と所謂埼玉編年(青木他1982)を比較してみると、筆者の加曽利EⅢ式土器(古段階)が埼玉編年の加曽利EⅢ式土器に概ね相当し、中野僧御堂遺跡8号住居跡(折原1976 57頁1・2)に示される段階(＝筆者の加曽利EⅢ式土器 新段階)は加曽利EⅣ式土器となり、両者の位置づけに齟齬がみられる。筆者は、雑駁に述べるならば、横位連携弧線文土器や意匠充填系土器の単位文化のなかから、加曽利EⅢ式土器を古／新段階に分離し、加曽利EⅣ式土器の細分は行い得なかった。中野僧御堂遺跡8号住居跡に示される段階の位置づけについては、単位文化の様相や、これらが加曽利EⅣ式土器の主要類型である球抱文土器(稲村1990)や入組懸垂文土器(加納1994)には伴わないという認識から、加曽利EⅢ式土器(新段階)と位置づけたものである。その際、筆者は球抱文土器や入組懸垂文土器については、加曽利EⅣ式土器として確実に認識されてきたと

いう研究史的経緯（共通の認識）と、埼玉編年での中野僧御堂遺跡8号住居跡段階の加曾利E IV式土器への位置づけと、当該編年案の研究者間への浸透という、この狭間のなかで苦慮することとなった。従って「各研究者が“概ね加曾利E IV式土器である”と納得するような視準的な類型を、便宜的に加曾利E IV式土器として設定し、一括資料でのチェックと理論的追求を同時に為すべき」立場（加納1994）を採った次第である。ともあれ、この問題については、中野僧御堂遺跡8号住居跡段階を加曾利E IV式土器へ位置づけたところでの加曾利E IV式土器の細分の可能性も含め、諸氏の批判・検討を仰ぎたいと思う次第である。

ともあれ、筆者の加曾利E III式土器（新段階）の策定については、筆者の変遷観をもとに土器群の分析が為されている多田遺跡（上守1992）においての、「大局的な変遷を支持する結果となった。しかしながらE III式新段階の設定は理論上は可能であるものの資料の零細さは否めず、一中略—さらに資料の増加した段階で型式学的に吟味する必要が指摘された。」との、肯定的且つ懐疑的評価が現段階では的確であろう。しかしながら、筆者の変遷観により集落分析がなされた結果、その妥当性が暗示されている（赤山1993）ことから、まさに上守氏が指摘するように、更なる資料の増加を期待しつつ、型式としての妥当性を検証し、研究史的背景をもふくめたところで、加曾利E III式土器（新段階）とするか、加曾利E IV式土器に編入して行くかを模索することになるであろう。

3. 林台遺跡の分析

林台遺跡は、柏市逆井に所在し、手賀沼に注ぐ大津川に面し、北東向きに突き出た舌状台地の奥まった位置に立地する（井上1989）。

報告書中で住居跡の時期が「加曾利E期」とされものは、1～57号住居跡・59～72号住居跡・75・76号住居跡であり、58号住居跡は「加曾利E期と推定される」とされている。

73・74号住居跡は、共に炉跡のみの検出であり、おそらく住居跡であったろうと思われる。また、24・44・47・51・58・73・74号住居跡は、出土遺物が認められないが、いずれも報告者によって「加曾利E期」とされている点や、県内の当該期住居跡の特徴からおおきくはずれることもないので、加曾利E期として捉えることに不安はないように思われる。その他、出土遺物から判断して、時期的に判然としないものとして、27・60号住居跡が挙げられる。また、45・48・54・75・76号住居跡出土遺物は、出土量がもともと少量であるものの、後期の破片が主体であり疑問が残る。しかし、27・60・45・48・54号住居跡に関しては、いずれも報告者によって「加曾利E期」とされている点や、やはり県内の当該期住居跡の特徴からおおきくはずれることもないので、加曾利E期として捉えることに不安はないように思われる。但し、76号住居

跡は、出土遺物が堀之内1式土器に限定し得る点と、炉跡の受熱範囲が堀之内1式期に特徴的なドーナツ状を呈していることから、壁柱穴が確認されていない点を考慮しても、堀之内1式期の可能性を指摘しておかなければならない。75号住居跡は、大半が古墳時代の住居跡に壊されているため判然としない。

ともあれ、報告者の認識を最優先させることから、上記の疑問の残る住居跡群を含めたところで、分析を行って行きたい。住居跡の設営時期は「加曽利E期」とされているが、今日的な成果から謂うところの「加曽利EⅢ式期（古段階）」と判断し得るものが圧倒的多数であり、明瞭な加曽利EⅣ式期のものは認められず、積極的に加曽利EⅢ式期（新段階）と判断し得るものも認められない⁹⁾。但し、土坑出土遺物では、加曽利EⅢ式土器（新段階）と思われるものが少量認められるので確定はし得ないものの、現段階では、加曽利EⅢ式期（古段階）の集落と捉えて大過なかろうと判断される。

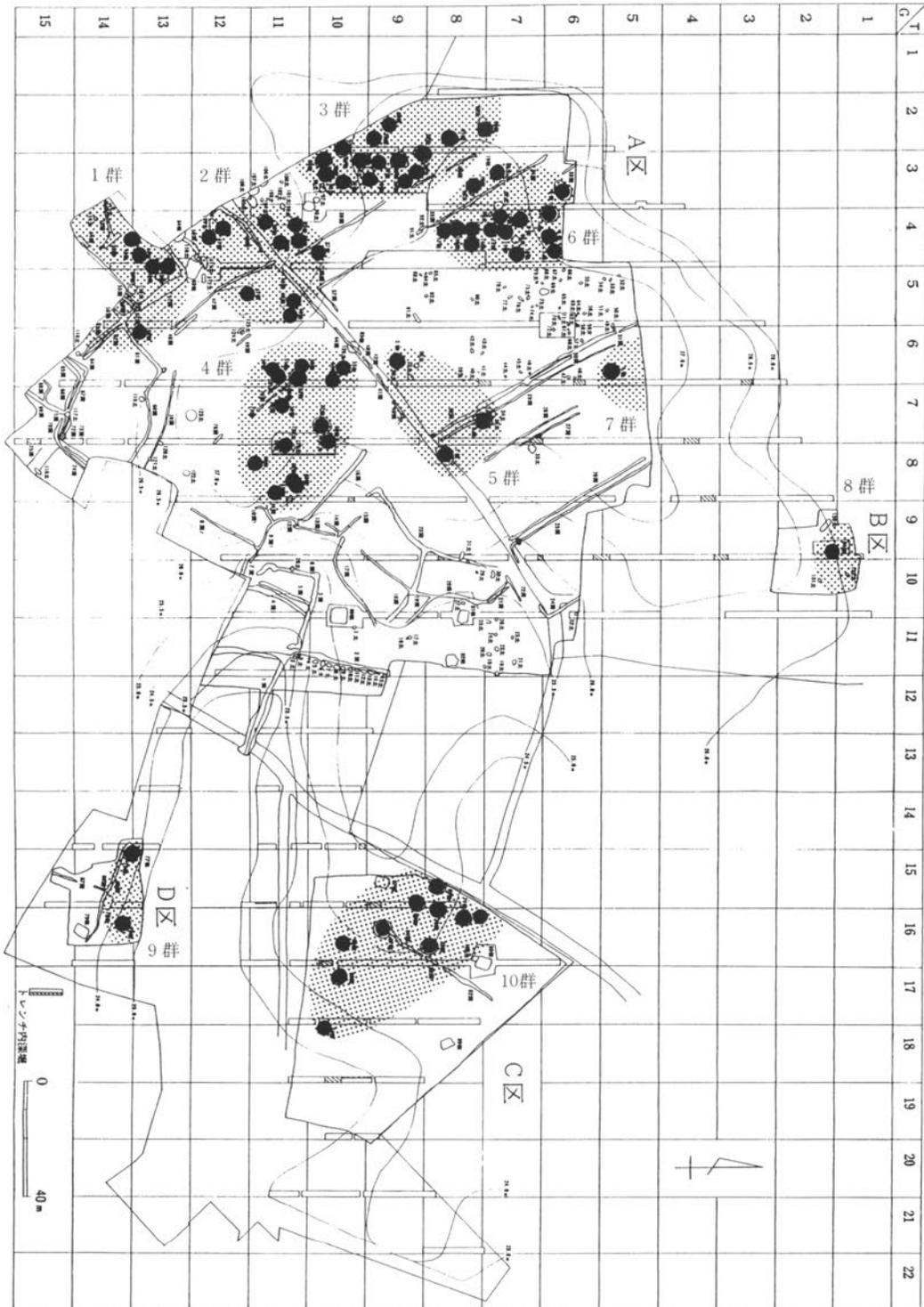
土坑は、時期不明のものを含め133基検出されている。このうち土坑中より「加曽利E期の破片が少数でも存在したものが36基とされ、報告書中に、土坑の時期を「加曽利E期」としたものは34基である。土坑の設営時期の認識が、当該期の遺物の出土の有無に大きく制約されることは当然であるが、出土遺物の認められない土坑群の性格を射程に置いたところで、次のような措置を採ることとした。

「加曽利E期」とされた土坑のうち主に平面形態から、当該期の可能性の低いもの、即ちコーナーのしっかりした方形の平面形態を有するものや、溝状に長楕円形を呈するもの、また、柵列状を呈するものは、「加曽利E期」とされているものの、当該期での扱いからは除外した。具体的には、8・11・12・33・92・118・124号土坑である。「時期は、不詳」とされた土坑群も、土坑分布の傾向を積極的に読み取るため、「加曽利EⅢ式期の可能性が有るもの」との積極的な評価のもと、分析の範疇に含めた。但しここでも、当該期の可能性の低いものは除外している。具体的には2～7・9・10・13～15・81・91号土坑が該当する。

(1) 遺跡の概観

林台遺跡は、A・B・C・Dの4区に分割され調査されているが、加曽利EⅢ式期（古段階）の住居跡の分布は第1図ようになる。

この分布状況から我々が第一義的に射程に据えなければならない点は、これらの住居跡が、今日的な具体的な時間幅である「加曽利EⅢ式期（古段階）」のなかにおさまっている以上、平面的な群在傾向（群別）の認識の可否に絞られてこよう。しかし当時の集団が、居住域の選択に際し、まとまりを持った場を共有していたという保証はない。また、具体的な時間幅というものが、瞬時的な同時性の累積であるという制約から、群在傾向も累積の結果でしかないという可能性も認めなければならない。しかし、「住居址群のブロック分けとその意義の追求は、集



第1図 林台遺跡全体図と中期後半住居跡群の分布 (井上1989より改変)

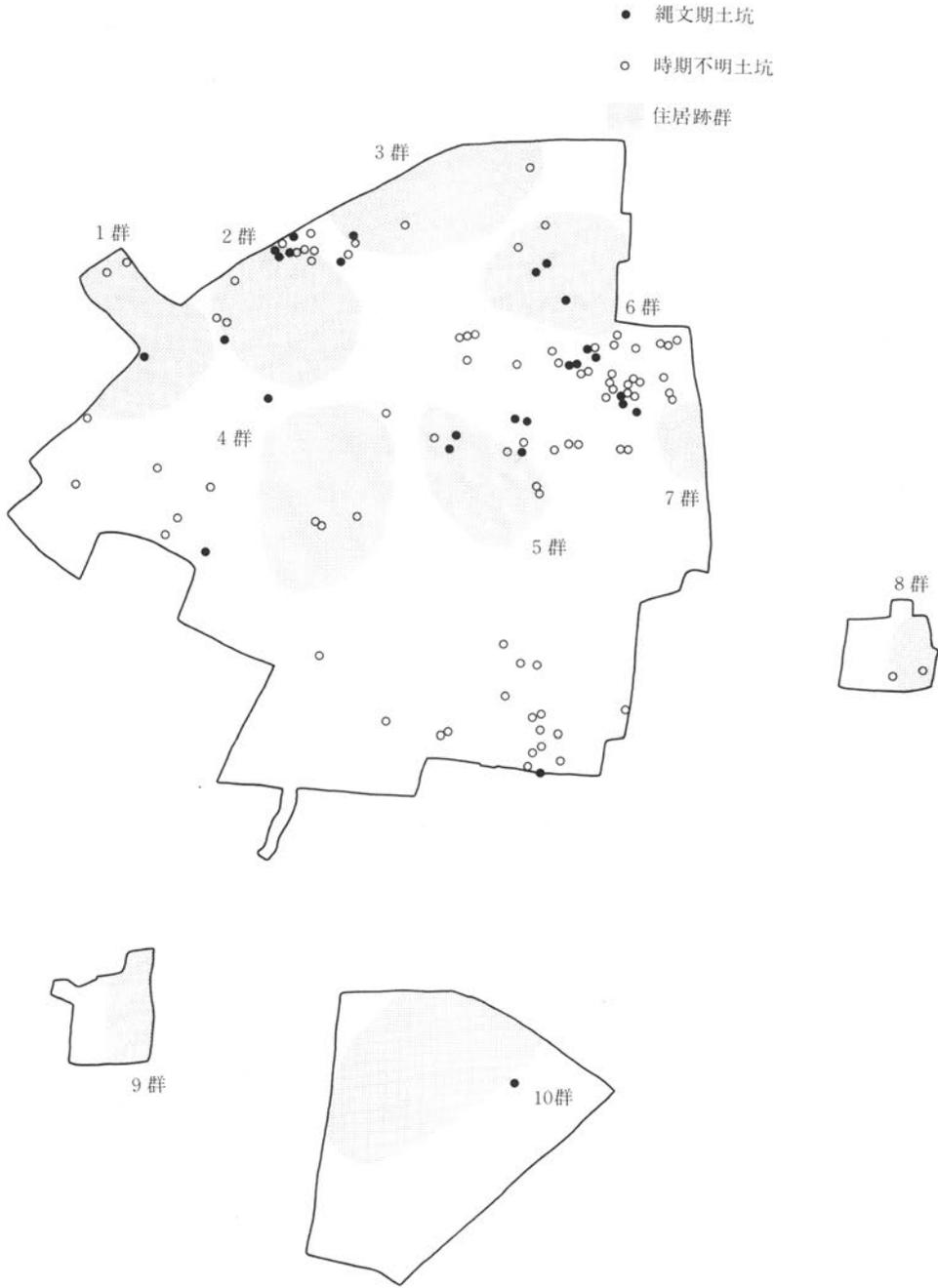
落址研究にあつて初歩的でこそあるが、適切かつ客観性ある処置を踏まえたものである限り、
「確実な視点を提供する一手段であることは否めない」(石井1993)ことも事実であろう。現実に、
山田大塚遺跡(石井1990)では住居跡の群在と類型化された土坑の群在の対応関係が抽出され
ており、併せて、住居跡の構築回数と貯蔵穴の数量の相関関係や貯蔵穴の形態的・量的変遷の
なかから、「社会変遷史」の解明に向けての多くの可能性が論述されている状況を垣間みれば、
林台遺跡の分析の第一段階が、群在傾向(群別)の把握に向けられることに異論はなからう。

繰り返しになるが、林台遺跡の集落は、概ね加曾利E III式期(古段階)におさまっているこ
とから、分布状況から直接的に群別作業へと進むことができる。

1群はやや東側に離れた住居跡を含めるか否かの疑問と、未調査区域での状況次第では2群
の南側の2軒を取り込んだところでの群別となる可能性もあろう。2群は東側の3軒が分離さ
れる可能性もあろう。3群は北側の2軒が分離され、6群西側の2軒と共に群別される可能性
もあろう。5群のような散漫な分布を示す一群の群別は便宜的なものである。6群は先述の3
群寄りの2軒の扱いのみが問題となろう。7・8・9群は調査範囲の制約から設定した便宜的
な群別である。10群は調査範囲の制約に引きずられている可能性もあろうが、限られた範囲内
での明瞭な群在傾向として群別を保証しているといえようが、二分される可能性もある。

以上、筆者の群別は、多くの別なる群別の可能性を多く含みつつ為されているが、この当否
が現段階で客観的に示し得ないことは言うまでもない。群別から論理的に再編成された、各群
や林台遺跡総体の評価によって、演繹的にこの群別の当否が問われるに過ぎない。故に、今こ
こで為すべき作業は、群別作業の妥当性の補強に絞られてこよう。先述の、林台遺跡の報告書
中において「加曾利E期」とされた土坑のうち、懐疑的な形態を除去したものと、「時期は、不
詳」とされた土坑のうち、加曾利E期に含み得るものを示したのが第2図である。本来ならば、
山田大塚遺跡で示されたように、土坑群を類型化し、各類型の組み合わせと群在傾向を絡めた
ところでの論証が望ましいが、林台遺跡検出の土坑の形態的バラエティーの多さから、客観的
な類型化を為し得なかった。この点については、山田大塚遺跡(関東地方南西部)での分類基
準を安直に林台遺跡に適用し得ない可能性や、山田大塚遺跡との時期的な差異の問題や、筆者
の県内の貯蔵穴/墓坑の弁別の困難な様相からくる、暗黙のうちの土坑の評価に対する消極的・
懐疑的姿勢に起因しており、機会を改めてこの問題をクリアしたいと考えるところであるが、
ともあれ、現段階で住居跡の群別と土坑の分布状況(第2図)を鳥瞰してみることにしよう。

加曾利E期の土坑を主眼に時期不明土坑を絡めて注目してゆくと、2群付近で時期不明土坑
を取り込んだかたちで、群在傾向が認められる。これについてはより3群寄りの一群を分離し
うる可能性も有ろう。5群内での3基の散漫な集中と、7群寄りの一群を抽出し得よう。6群
内にも散漫な集中が認められる。6群と7群の間には、加曾利E期土坑を主に時期不明土坑を



第2図 林台遺跡住居跡群の分布と土坑の分布

取り込んだところでの群在傾向を二つ看取り得よう。5群と10群の間にも、調査範囲の制約から確定し得ないものの、群在傾向を想定し得よう。

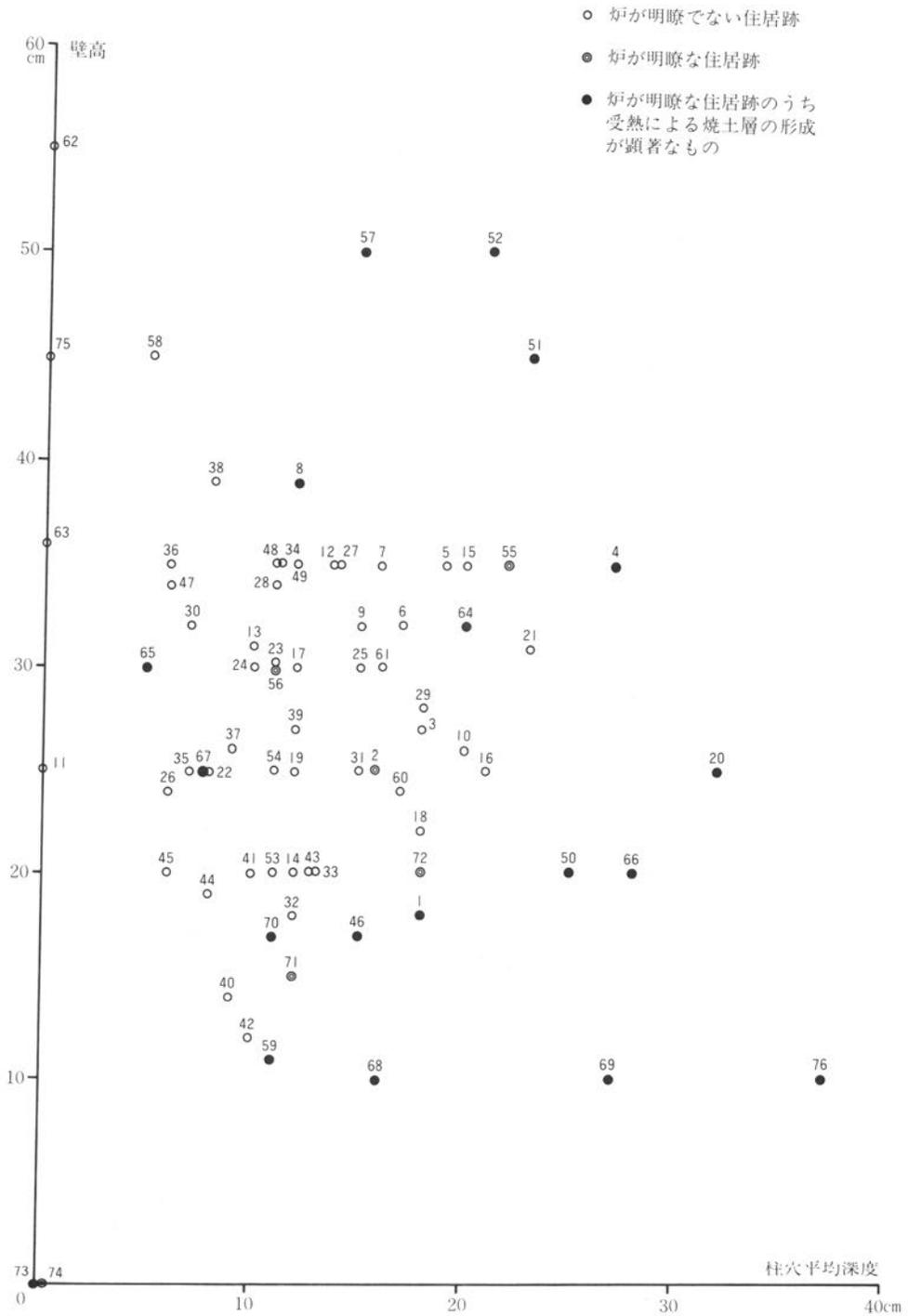
このように林台遺跡の土坑は、分布状況から5～8程度の群在傾向を看取り得るものであり、その他散漫な加曾利E期土坑の存在や、未調査区域の制約を考えれば、住居跡の群別に概ね対応してくる可能性が高く、両者の群別の妥当性を一定程度保証していると捉えて大過なからうと思われる。

(2) 住居跡の様相

千葉県内での加曾利E式後半期の住居跡の調査に携わった際、当該期住居跡のだらしなさを率直な印象として受けることが頻繁である。即ち、浅い掘り込みや、軟弱な床面と壁等、“本当に床なのだろうか”、“本当に壁なのだろうか”、“本当に住居跡なのだろうか”と悩まされる場合が多い。浅い掘り込みや、軟弱な床面と壁は、表裏一体であり、床面をハードローム層レベルまで彫り込んでいないので、結果として床面・壁の検出をより困難にしているのとも考えられるが、それにしても、この浅い掘り込みや、軟弱な床面と壁には毎度のことながら悩まされることとなる。これに加え、明瞭な柱穴が少なく、プランの確認後、掘り初めても、浅く終わってしまい、試行錯誤を繰り返し、一定の深さを有するものを柱穴として認識し、浅い柱穴の取り扱いについては、実測の対象からはずれることもあり、自信(確信)が無く、きれいなローム土で埋め戻して抹殺してしまいたい衝動に駆られ、事実そうする場合もある。また、明瞭に支柱穴を認識し得るものも少なく、加曾利E式前半期の住居跡との大きな差異を実感するところでもある。更に炉跡も、明瞭な焼土の堆積や、受熱による明瞭な赤化・硬化範囲が認められるものが多くなく、住居跡中央部で覆土中に散漫に焼土粒を含む落ち込みを、炉跡として認識せざるを得ないような感が強い。無論これらの特徴をもって県内の当該期住居跡を普遍化し得ず、しっかりとした住居跡も認められるところではあるが、少なくとも、県内の加曾利E式前半期の住居跡との比較に於いては、このような住居跡の激増する様は、明瞭な差異の傾向として指摘し得よう⁽¹⁰⁾。

林台遺跡の住居跡の分析に際しては、この、浅い掘り込み(壁)・柱穴・炉跡に注目してゆきたい。第3図は、壁高を縦軸に、柱穴深度を横軸に採り、各住居跡の炉跡の状況の散布を示したものである。壁高は報告書に記載されている計測値を用い、柱穴深度は、報告書に記載されている各住居跡の総ての柱穴の計測値(床面からの深度)の平均値を用いている。炉跡の分類は報告書の記述に準拠している。即ち、

1. 炉跡の認められないもの
2. 炉跡が認められるもの
3. 炉跡が認められるもののなかで、炉跡に「焼土レンガの堆積」が認められるもの、



第3図 林台遺跡検出住居跡の壁高と柱穴平均深度の相関

とされたものである。

実際の理解に関しては、対象となる76軒の住居跡のなかで、炉跡が検出されていないとされている住居跡は実に51軒にも及ぶ。これらには、柱穴も確認されていない11・62・63号住居跡のような大型の土坑の可能性もあるものや、14・58・75号住居跡のように調査区限界隣接したり、土坑・他の住居跡との切り合いにより判断し得ないものが含まれているものの、これらを差し引いたところで、更に堀之内1式期の可能性の高い76号住居跡も除外したところで、69軒のうち実に45軒（約65%）の住居跡に炉跡が認められないこととなり、懐疑の念を抱かざるを得ない。調査段階や報告段階での炉跡の有無の認識について興味深いのは、31号住居跡中で「炉址は、検出されなかったが、これに類するものとしてP10に少量の焼土粒子の堆積が認められた」とされている点であり、炉跡の認識が焼土の有無（多少）に大きく依存していたことが窺えよう。この点と、先述の当該期住居跡の炉跡の様相を考えあわせれば、“確実な炉跡として捉える根拠に乏しかった”と考えるのが妥当であり、とりあえず、“炉跡の明瞭でない”ものとして捉え直しておく。「焼土レンガの堆積」とはいわずもがな“受熱により炉跡底面・壁面が赤化・硬化し、焼土層・焼土塊の形成が顕著なもの”である。

さて、上述の点を踏まえ第3図に注目すると、柱穴が未確認の11・62・63・75号住居跡、単独の炉跡のみの73・74号住居跡、堀之内1式期の可能性の高い76号住居跡を除外すれば、明瞭な傾向を読み取ることができる。即ち、壁高・平均柱穴深度において、全体の散布から卓越する4・20・50・51・52・57・66・69号住居跡は、総て受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有している点である。73・73号住居跡を除外したところで、受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有している住居跡17軒のうち約半数の8軒が全体の散布から卓越することとなり、炉跡の明瞭でない住居跡が概ね全体の散布から大きくはずれることなく、規格的に均質であることと対峙させるならば、この傾向はより一層顕著なものとして捉え得る。

さて、以上のような客観的事実は一体何を物語っているのであろうか。二極的に捉えるならば、相対的に低い壁高・浅い柱穴と、相対的に深い壁高・深い柱穴という表面的差異は、各々の居住単位・単位集団⁽¹¹⁾の伝統の差異の可能性でもありと同時に、住居設営時に投入される労働力の差異としても明確に区別し得るであろう⁽¹²⁾。また、受熱による焼土層の形成の顕著な炉跡と、焼土が散漫な炉跡では、明らかに炉自体の機能していた具体的時間幅に差があることも否めないであろう⁽¹³⁾。そして、林台遺跡での壁高・柱穴深度の卓越した住居跡と、受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡の相関関係から推し測るならば、壁高・柱穴深度の卓越した住居（しっかりとした住居）の設営は、相対的ながら長期間の居住の痕跡を示し、卓越しない住居は相対的に短期間の居住の痕跡を示しているものと捉え得るところであり、この対応関係は、想像を逞しくするならば、住居設営時の計画性の差異をも推測することができるのではなからうか。

整理するならば、

1. 相対的な長期居住計画＝相対的に多くの労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越した住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に長期的な居住の痕跡を認め得る
2. 相対的な短期居住計画＝相対的に少ない労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越しない住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に短期的な居住の痕跡を認め得る

と概念化することができる。無論この対比は、両極的な対比、且つ林台遺跡内のみでの相対的な対比であり、当該期の住居の設営時から廃絶に至るまでの総ての過程を、この概念を以て網羅し得ないことは自明である¹⁴⁾が、この両極的な概念提示の妥当性の証左について若干述べておきたい。

県内の当該期住居跡を鳥瞰すると、建て替えの認められる住居跡は極めて希である。ところが、林台遺跡では、51・52・57・59号住居跡の4軒において貼床が認められ、共に貼床下から柱穴が確認されている。この4軒の住居跡が総て受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有していることは注目しておかなければならない。更に、これらのうち51・52・57号住居跡の3軒は、壁高・柱穴深度の卓越した住居跡であることにも注目しておかなければならない。建て替えを、偶発的な上屋の崩壊・修理という要因に帰結させ、積極的評価を下さない立場であろうが、この4軒の住居跡が総て受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有していることは、この偶発的要因から一步踏み込んだ解釈の必要性を暗示しているものと考えられよう。住居の建て替えの必要性には、上屋の崩壊・修理、竪穴の拡張・収縮等、物理的な一次的要因と、今日的な範疇からは直接的に推し測れない(所謂祭祀的な)二次的要因があらうと思われるが、一次的要因の立場に立脚するならば、そこでの選択は、同一集落内(もしくは集落外)で新たな住居を構築するか、建て替えを行うかであろう。同一集落内での新たな構築や集落外への構築(移動)に関しては、今日的な論証(追求)が困難であるが、少なくとも建て替えに関しては、“従来の居住の場を強く意識したところでの更なる居住期間の延長である”ことは間違いない。このような点から推し測ると、林台遺跡の、この4軒の住居跡が、総て受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有しているという関係は、前述の、“相対的な長期居住計画＝相対的に多くの労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越した住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に長期的な居住の痕跡を認め得る”という解釈を保証すると共に、前述の両極的な概念の安定性をも概ね保証していると考えられよう。更に補足的に述べるならば、居住期間を云々する際に、今日的な不確実な要因が少ない有効な視点としては、床面の硬化が挙げられる。但しこの視点についても、経験的な視点から述べるならば、床面がハードローム層に及んでいるものに対し一定の先入観があることは否めない。そして床面のハードローム層での形成は、概ね壁高や立地(平坦面/緩斜面、本来的な表土厚)にも左右されてしまうこととなり、この視点にも若干

の不確実な要因が含まれることとなってしまいます。しかしながら林台遺跡では、概ね一定の傾向を看取し得るところであるので、この点について述べておきたい。先述の11・62・63・73～76号住居跡等、当該期住居跡として懐疑的な一群を除いたところで、報告書中で床面に関し全面乃至部分的であれ、“硬化”や“締まる”という状況説明が為されているものを取り上げると⁽¹⁵⁾、

1. 炉跡の認められないもの

総軒数47軒中24軒に記述あり 51%

2. 炉跡が認められるもの

総軒数5軒中5軒に記述あり 100%

3. 炉跡が認められるもののなかで、炉跡に「焼土レンガの堆積」が認められるもの

総軒数17軒中15軒に記述あり 88%

となり、明瞭な傾向を示すこととなり、やはり、“相対的な長期居住計画＝相対的に多くの労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越した住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に長期的な居住の痕跡を認め得る”という解釈を保証してくれる。

それでは、この両極的な住居跡が、各群別の中でどのように展開しているかを探っていくこととなるが、分析を進めるに際しての全く便宜的な呼称方法（類型化）を明示しておきたい。

A類型 炉跡の明瞭でない住居跡

B類型 炉跡の明瞭な住居跡

B1類型 炉跡の明瞭な住居跡のうち 受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有する住居跡、である。いうまでもなく、特にB1類型とA類型の類型化の背後には、先述の、“相対的な長期居住計画＝相対的に多くの労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越した住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に長期的な居住の痕跡を認め得る”／“相対的な短期居住計画＝相対的に少ない労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越しない住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に短期的な居住の痕跡を認め得る”という両極的な様相の照射を企てていることは理解していただけるかと思う。

(3) 住居跡群の様相

各住居跡群（群別）のなかでの各類型のあり方を示したものが第4図である。群別に不安定要素がつきまとう5・7・8・9群を除外したところで鳥瞰してみると、はっきりとした傾向を看取することができよう。全く便宜的に“型”として概念化するならば、

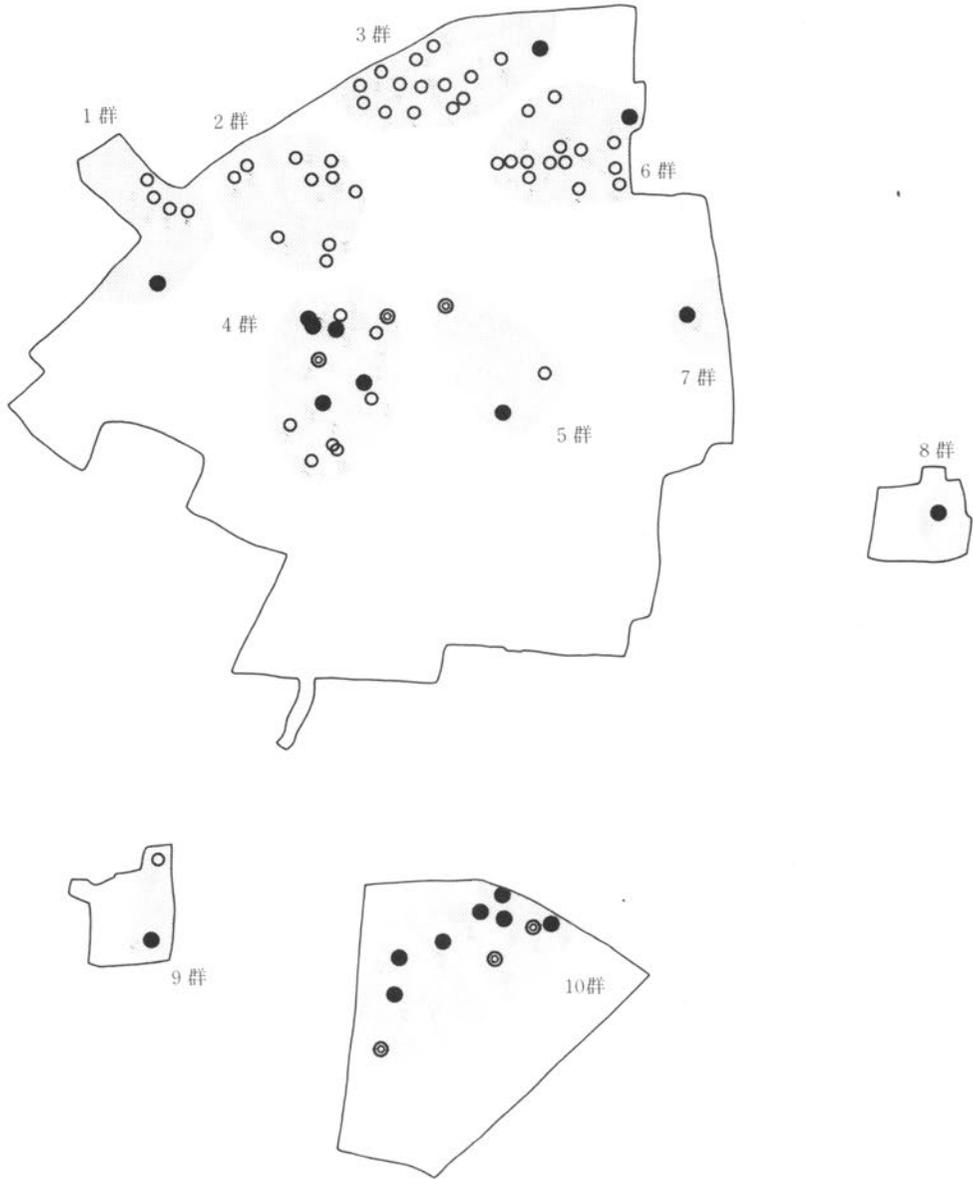
I型 B1類型を主体にB類型が加わる構成を示すもの ～ 10群

II型 B類型・B1類型とA類型がほぼ等しい構成を示すもの ～ 4群

III型 A類型を主体にB1類型が一軒加わる構成を示すもの ～ 1・3・6群

IV型 A類型のみによって構成されるもの ～ 2群

- 炬が明瞭でない住居跡(A類型)
- ◎ 炬が明瞭な住居跡(B類型)
- 炬が明瞭な住居跡のうち
受熱による焼土層の形成
が顕著なもの(B1類型)



第4図 林台遺跡住居跡群の分布

と、捉えることができよう。

ところで、筆者の群別が、多くの別なる群別の可能性を含みつつ為されている点については前述した。また、この群別の当否が、群別から論理的に再編成された各群や林台遺跡総体の評価によって、演繹的に問われるとの立場を採ったが、ここで改めて、前述の“多くの別なる群別の可能性”について検証して行きたい。

1群のやや東側に離れた住居跡を含めるか否かの疑問と、未調査区域での状況次第では2群の南側の2軒を取り込んだところでの群別となる可能性であるが、やや東側の住居跡、即ちB1類型を群別から除外すると、2群南側の2軒を取り込んだところでA類型のみによって構成される群別となる。

2群は東側の3軒が分離される可能性は、この3軒が分離されたところでもA類型のみの構成であることに変わり無い。また、この分離された3軒自体もA類型のみの構成であり、仮にこの3軒が4群に組み込まれることになろうとも、4群のB類型・B1類型とA類型がほぼ等しい構成が大きく変わることはない。

3群の北側の2軒が分離され6群西側の2軒と共に群別される可能性は、3群がA類型のみによって構成されることになり、新たな群別は、B1類型1軒とA類型3軒の構成となる。

4・10群のそれぞれ二分される可能性については、二分されたところでの構成差は認められない。

以上のことから、1・3群の、A類型を主体にB1類型が1軒加わる構成が、A類型のみによって構成されるものである可能性と、3群と6群の間に、A類型を主体にB1類型が1軒加わる構成を認識し得る可能性もあるが、遺跡全体を鳥瞰したところで、B類型・B1類型の極所的分布と散漫な分布という様相から推し測るならば、構成比に於いて、B類型・B1類型の、卓越／1軒のみ／構成に加わらない、という三様相の存在自体は疑う余地が無く、筆者の群別は、現段階では概ね妥当性を有していると捉えられよう。

以下、各群内の住居跡の特徴的な様相を概観するが、特記すべき住居跡を含まない群については省略することとしたい。

1群 46号住居跡の炉跡はタライ状のしっかりとした掘り込みを有しており、炉壁がほぼ垂直に立ち上がっている。

3群 20号住居跡（第6図6）の炉跡は報告書では、長楕円形で両脇中間がくびれるとされており、平面図・断面図から判断すると2個の掘り込みから成るようで、一方の掘り込みに炉体土器が埋設される。柱穴のならばには埋甕が設けられている。炉跡の複構造から建て替えを示唆し得るところであるが、例えば、林台遺跡において炉跡が複構造を呈する住居跡は、20・50・52号住居跡であるが、この3軒の内、貼床下柱穴を有するものは52号住居跡のみである。

逆に、貼床下柱穴を有する51・52・57・59号住居跡のうち、炉跡が複構造を呈するものは、やはり52号住居跡のみであり、この52号住居跡の炉跡の複構造を呈する部位の一方に貼床が認められているわけではなく、概ねこの複構造が本来的な姿であったことを彷彿とさせる。32号住居跡は攪乱により破壊されている範囲が大きく不鮮明であるが、やや張り出した壁際に深鉢が正位に遺棄されているようである。

4群 50号住居跡は長軸1.75mの楕円形の掘り込み中に径80cmの円形の掘り込みを有するという複構造の炉跡を有している。51号住居跡は建て替えが認められる。52号住居跡は建て替えが認められると共に、複構造の炉跡内の一方に炉体土器が認められる。57号住居跡は建て替えが認められると共に、炉壁には灰白色粘土が貼り付けられている。59号住居跡は建て替えが認められると共に、46号住居跡同様炉跡の壁が垂直に立ち上がる特徴を有している。62・63号住居跡は土坑の可能性もある。

5群 1号住居跡は短い壁溝状の落ち込みを幾つか認めることができる。炉跡覆土内にはほぼ完形の器台が認められ、住居廃絶時の何らかの行為が推測される。

6群 8号住居跡の炉跡は炉体土器を有している。11号住居跡は土坑の可能性もあるが判然としない。14号住居跡はやや張り出した壁の近くに埋甕を有する。

7群 4号住居跡の炉跡は炉体土器を有している。

8群 64号住居跡の炉跡は炉体土器を有していると共に、46・59号住居跡の炉跡同様、炉壁が垂直に立ち上がる。

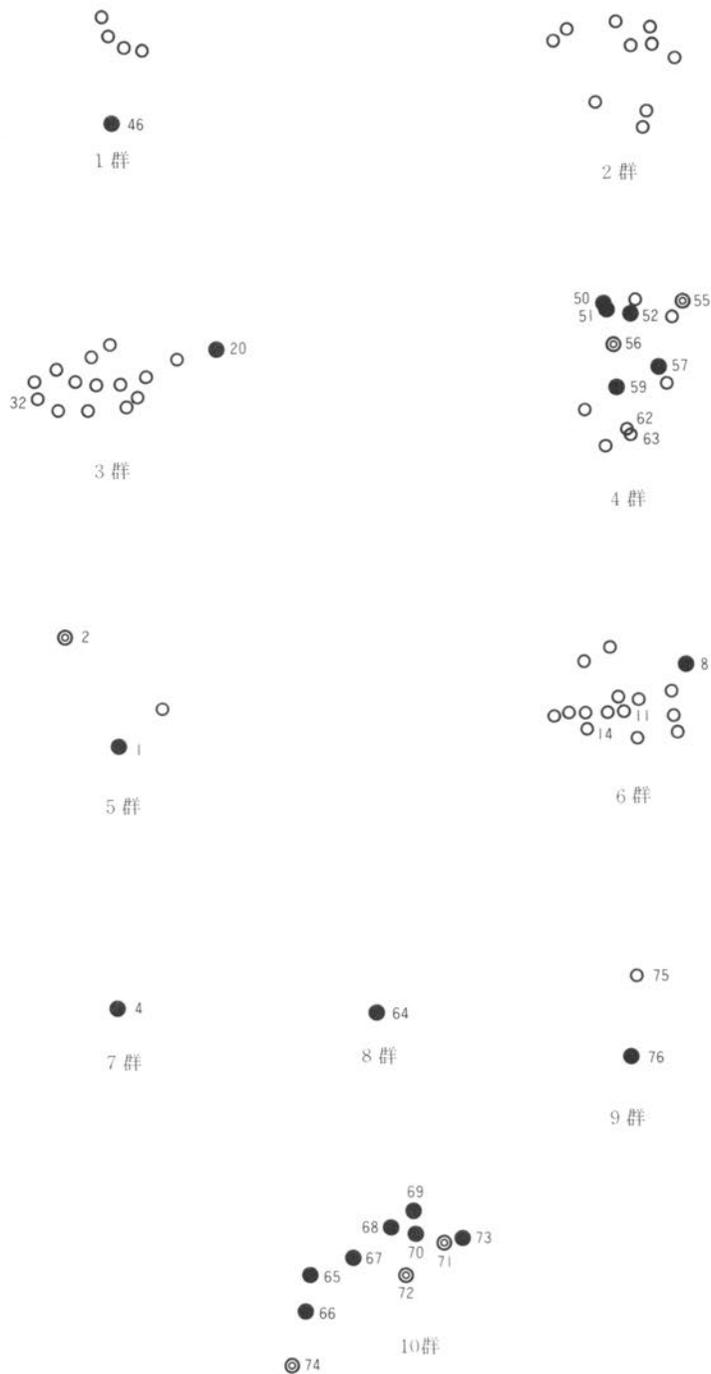
10群 66・67号住居跡の炉跡は炉体土器を有している。69号住居跡は埋甕を有している。70号住居跡の炉跡は複構造を有し、一方の炉跡覆土上面から床面にかけて完形に近い深鉢が斜位に遺棄されているようである。72号住居跡の炉跡は炉体土器を有している。床面には石皿・凹石が遺棄されているようである。73・74号住居跡は単独の炉跡のみの検出である。

以上、各群別内の住居跡の様相を概説したが、先述の“型”としての分離と、相対的居住期間の背景を含んだところでの炉跡の類型化とを絡めて、林台遺跡の復原を行いたい。尚、B1類型の性格については“相対的長期居住”、A類型については“相対的短期居住”としておきたい。但しいうまでもなくこれはあくまでも林台遺跡での住居跡（炉跡）の相対的比較からの弁別である。

(4) 林台遺跡の復原

I型 B1類型を主体にB類型が加わる構成を示すもの ～ 10群

B1類型の相対的長期居住を主体にB類型が加わるという、比較的均質な様相を呈している。住居跡は相互の重複が顕著でなく、相互に一定の距離が保たれている。71号住居跡と、炉跡のみが検出されている73号住居跡の重複が予想されるものの、原風景を比較的良好に示している



第5図 林台遺跡各住居跡群の分析

可能性もあろう。さて、I型の構成の示す実態として興味深い傾向が指摘される。前述の、調査段階での経験的な住居跡の差異の認識なかで、加曾利E式前半期と後半期の差異の基準のひとつに、支柱穴の認識の可否を取り上げたが、今、報告書中の記述で支柱穴を認識し得たか否かを示してみると⁽¹⁶⁾、

A類型 47軒中6軒に支柱穴を認識 13%

B類型 5軒中3軒に支柱穴を認識 60%

B1類型 17軒中15軒に支柱穴を認識 88%

となり、極めて明瞭な傾向を指摘することができる。無論、支柱穴の認識の可否が、柱穴深度や柱穴の本数に制約される状況を踏まえ、今日的な支柱穴の認識の可否が、実体をどの程度反映しているのか、即ち今日的に支柱穴と認識するものの有無が、上屋の構造の差異を示すのか、耐用年数を射程に据えたところでのものなのか、今日では容易に推し測れないが、ともあれこの10群に注目するならば、構成する10軒の住居跡のうちの6軒に支柱穴が認識されていることは、A類型が構成に含まれていないことも含めて、極めて加曾利E式前半期的様相を示していると捉え得よう。

ところで、加曾利E II式期以前と加曾利E III式以降の集落の様相を大局的に比較すると、「加曾利E II式期の集落群は、大規模な集落址を中心として、集落址が群在する傾向を示す」(石井1977)のに比べ、加曾利E式終末期では「加曾利E II式期に認められた集落地ブロックの枠をはみ出て、分散するがごとき状況を呈し、それ以前には居住されることのなかった区域にさえ積極的に進出している」(石井1977)との評価を与えることができよう。いま、これらを“集落的群在居住”と“非居住域への分散居住”として概念化し対峙させるならば⁽¹⁷⁾、林台遺跡のI型の性格、即ち、B1類型の集合体の性格は、この非居住域への分散居住としての性格を有していると捉え得ることもできよう。しかし、厳密に同時存在とは確認し得ないものの、10軒という比較的多い居住単位数や支柱穴の認識から捉え得た、加曾利E式前半期的様相の残存という性格や、相対的長期居住という性格を帯びていることから、林台遺跡のI型の性格はこの“非居住域への分散居住”であると同時に、“集落的群在居住”の集落的居住という側面をも有しているといえよう。ともあれこのI型は、後述する他の型との比較においても、林台遺跡の台地に刻印された最初の集落跡である可能性を指摘し得よう。

II型 B類型・B1類型とA類型がほぼ等しい構成を示すもの ～ 4群

II型の評価は、B類型、B1類型(相対的長期居住)とA類型(相対的短期居住)がほぼ等しい点ではなく、B類型・B1類型に、多くのA類型が加わるという評価であろう。また、具体的に、II型に示されるB類型・B1類型の軒数(7軒)が、I型の10群に示される10軒に比べ、減少化を窺わせていることも興味深い。無論この4群自体が、全く別個のB類型・B1類型の単

位集団と、A類型の単位集団の、集落設営の時間的な差異が、今日、偶然に累積的に現象している可能性が払拭されてはいない。しかし、今日的な加曾利E III式期（古段階）という具体的時間幅におさまり、尚且つ「住居址群のブロック分けとその意義の追求は、集落址研究にあって初歩的でこそあるが、適切かつ客観性ある処置を踏まえたものである限り、確実な視点を提供する一手段であることは否めない」（石井1993）という観点に立脚する限り、今日的に、方法論的な不備（逸脱）を認識し得ず、方法論的妥当性は概ね確保されているとの立場から、まさに、II型として論を進めることとしたい。

A類型（相対的短期居住）に示されるような住居跡の出現の経緯については判然としない。加曾利E II式期での少数的存在を認めたところでの、伝統の差異として捉え得る可能性も僅かではあるが存在しよう。また、当該住居跡の急激な量的増加が捉えられている以上、加曾利E II式期の一般的なしつかりとした住居跡から時間的傾斜を以て変異した可能性や、他地域からの影響のもと生成した可能性が問われることとなるが、現段階では、土器論上の立場からも、住居跡自体の分析からも、説明されるような現状にはない。このことは、むしろ、「中期最終末期における集落経営の断絶、あるいは新地点での新たな集落形成といった動き」即ち、「中期集落址群の構成が崩壊してゆく」（石井1994）なかで、突発的に生成してくる可能性が高いということを示しているのではなかろうか。想像を逞しくするならば、「漸次膨張していった人口と自然界とのバランスが崩れ、ついに破局を迎えるに至った」（石井1977）“集合的群在居住”を示す社会は、「最小単位にまで分裂し、以前は居住区域外とされていた区域までをも居住域となす」（石井1977）という“非居住域への分散居住”を示す社会に変質し、最小単位としての単位集団化は、目的的であれ、二次的であれ、「小単位の構成が移動に適している」（石井1977）という、移動に富んだ居住形態への適応性の生成を促し、“相対的な短期居住計画＝相対的に少ない労働力の投入＝壁高・柱穴深度の卓越しない住居の設営＝炉跡の様相から、結果的にも相対的に短期的な居住の痕跡を認め得る”という傾向を示す住居の設営が、促進・顕在化するものと考えられるのではなかろうか。

ともあれ、このような観点に立脚するならば、林台遺跡のII型に示された構成は、加曾利E式前半期的様相の残存を示す単位集団（B類型、B1類型＝相対的長期居住）と、極めて加曾利E式後半期的様相を示す単位集団（A類型＝相対的短期居住）が居住の場を共有している可能性が指摘され、加曾利E III式期（古段階）の、単位集団の異質な二階層性の存在が浮かびあがってこよう。約めて謂うならば、各居住単位が、極めて加曾利E式前半期的な紐帯関係を有する単位集団と、加曾利E式後半期的な紐帯関係を獲得した（獲得せざるを得なかった）単位集団が、混在している状況を看取することができよう。また、I型に比べたところで、B類型・B1類型の住居軒数の減少化と、新たなA類型の出現という点に注目するならば、林台遺跡での

II型の出現は、I型の出現からの一定の時間的傾斜を有している可能性を指摘し得るのかもしれない。

B1類型に顕著な相対的長期居住と、A類型に顕著な相対的短期居住の共存は、相対的長期居住を示す住居の設営から廃絶に至る時間幅と、相対的短期居住の時間幅との不一致を前提に据えると、この二階層性が際だつこととなる。無論“受熱により炉跡底面が赤化・硬化し、焼土層・焼土塊の形成が顕著なもの”と“炉跡自体が明瞭でないもの”の差異、即ち、焼土層・焼土塊の形成が顕著になるまでの時間幅(使用期間)と、そこまでは至らないという時間幅(使用期間)が実年数としてどれほどの差異を有していたかは疑問が残ろうが、ともあれ、相互が同時に場を共有している具体的時間幅の存在が認められようとも、移動—住居設営—廃絶—移動という、居住に関わるサイクルを両集団が共有していないことを示し、まさにサイクルを共有しない別の単位集団の、場の共有を示すことになる。

いずれにしろ、この4群は、林台遺跡の各群のなかでも、唯一住居相互の切り合いが2地点認められ、共に同類型相互の切り合いであることから、単純な解釈が通用しないことを物語っているといえよう。

III型 A類型を主体にB1類型が一軒加わる構成を示すもの ～ 1・3・6群

III型の評価は、B1類型(相対的長期居住)の一軒という点ではなく、大多数のA類型(=相対的短期居住)に少数のB1類型という構成にある。I・II型で示された、B類型・B1類型の住居軒数の減少化と、新たなA類型の出現という点から類推し得る時間的傾斜に注目するならば、III型も、II型からの若干の時間的傾斜を類推し得よう。

1群には調査範囲の制約を含めて不安定な要素がつきまとうことになるが、3・6群は概ね、このような評価を下し得るものと考えられる。ともあれ、B1類型での集合的群在居住の末期的な様相ともいべき少数(単独)の居住に、大多数のA類型が加わるという姿であり、1・2群が分割不可の同一の群別であっても、3・6群も同様に分割不可の同一の群別であっても、この評価に変更はない。いずれにしろ、1・3・6群にあつては、共に調査範囲の制約を有しつつも、B1類型の住居跡の位置が、群別内の分布のなかに取り込まれているのではなく、外縁に位置するという共通性を有していることは示唆的である。

III型での単独のB1類型の住居の存在が示すところは、二階層の単位集団のうち集合的群在居住を採る単位集団は、加曾利E式前半期的な紐帯関係を固持しつつも、「最小単位にまで分裂し、以前は居住区域外とされていた区域までもを居住域となす」(石井1977)という趨勢のなかで、紐帯関係が崩壊し、まさに最小単位(一軒)として存在することを余儀なくされたかのような様相であろう。しかしなお、“相対的な長期居住計画=相対的に多くの労働力の投入=壁高・柱穴深度の卓越した住居の設営=炉跡の様相から、結果的にも相対的に長期的な居住の痕跡を

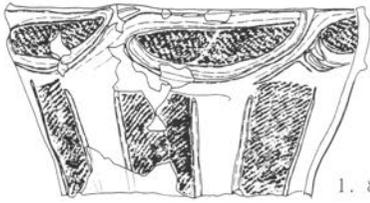
認め得る”という様相を示し、居住の場に固執したところで、A類型に比べれば再生産を支えるために必要な活力を有していたことも窺えよう。

更に、相対的長期居住を示す住居（B1類型）の設営から廃絶に至る時間幅が、相対的短期居住（A類型）の時間幅と一致せず、両者の居住に関わるサイクルにズレが存在する可能性を認めておかなければならないという前提に立脚するならば、B1類型の住居跡の設営期間に比較されるべき、3群のA類型の13軒、6群のA類型の14軒もの住居が、各々B1類型とどのような構成を示しながら同時存在したかが問題となろう。想像を逞しくするならば、B1類型の、再生産を支えるために必要な活力の保持が、活力を求める単位集団に対しての求心力を有するならば、このような前提が許容されるならば、B1類型との紐帯関係を模索すべく、数軒単位のA類型の複数の単位集団が、B1類型との場の共有をしつつ、紐帯関係を模索しては去って行くという繰り返しの、動的な景観を予想することもできよう。

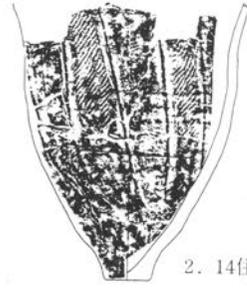
IV型 A類型のみによって構成されるもの ～ 2群

II・III型に認め得た単位集団の二階層性は認められない。I型のB類型、B1類型（相対的長期居住）のみの構成という均質な構成を視座に据えるならば、IV型のA類型（相対的短期居住）のみの均質な構成は、対照的に際だつことになる。また先述の、B類型・B1類型の住居軒数の減少化と、A類型の増加から類推し得る時間的傾斜に注目するならば、IV型はIII型からの若干の時間的傾斜をもって出現した可能性を類推し得るところでもある。ともあれ、IV型が加曾利E III式期の“非居住域への分散居住”を示す社会、即ち最小単位としての単位集団化の痕跡であるならば、2群で示される10軒という住居跡数は、やはり時間的累積の結果であるのかもしれない。

以上、住居跡の群在傾向（群別）内での住居跡の種類の構成差を、便宜的に“型”として分類し、各々の型の解釈を行ってきたが、最後に問題となる点は、各群の時間的な関係であろう。これについては前述した通り、住居内出土の土器群が概ね「加曾利E III式土器（古段階）」におさまっている以上、困難を極めることには多言を要さない。厳密に追求するという意味で、明らかに住居の設営期間に付随し、住居の廃絶に伴い住居内に遺棄された土器群（埋甕・炉体土器）を図示したものが第6図である⁽¹⁸⁾。個々の土器に注目すると、9を加曾利E III式土器（古段階）として捉えるか否か問題となろう。当然加曾利E II式土器（新段階）との評価の方が妥当性を有しているといえる。但し冒頭で取り上げた林台遺跡52号住居跡出土土器群（第13図8～12）で示された構成に着目するならば、9は“概ね横位連携弧線土器が成立しているであろう段階＝加曾利E III式期古段階”としての位置づけを積極的には否定しきれない。しかし、9が遺棄された67号住居跡の覆土内の土器群に、本遺跡唯一の連弧土器が認められることは注目しなければならない。無論、連弧土器が加曾利E III式土器（古段階）にも残存すること



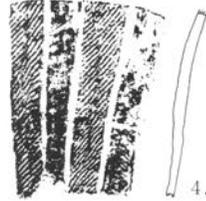
1. 8住(6群)灰



2. 14住(6群)埋裏?



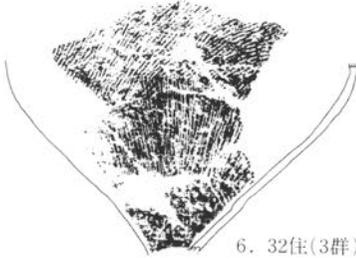
3. 20住(3群)灰
(4と同一個体)



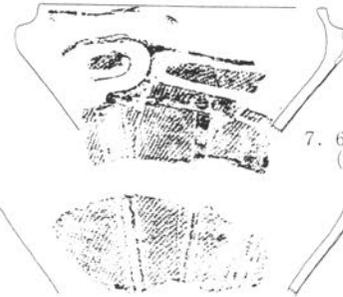
4. 20住(3群)灰



5. 20住(3群)埋裏



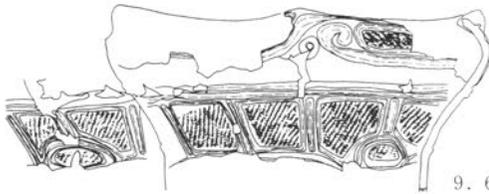
6. 32住(3群)埋裏?



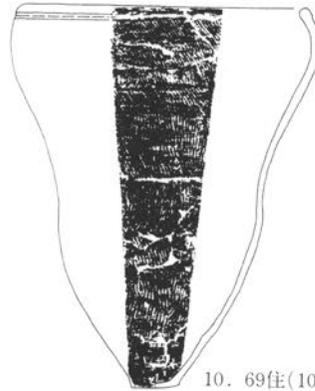
7. 66住(10群)
(8と同一個体)



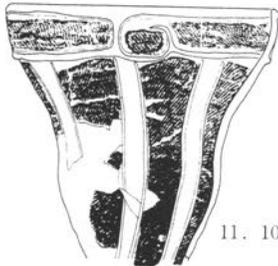
8. 66住(10群)灰?



9. 67住(10群)灰



10. 69住(10群)埋裏



11. 10住(10群)灰?



12. 72住(10群)埋裏

第6図 林台遺跡出土の炉体土器・埋裏

も承知であるが、ともあれ9は、現段階では他の土器群に比べ若干先行する可能性が強いことだけは確実であろう。即ち9が遺棄されていた67号住居跡を構成に含む10群が、本遺跡で最初の足跡を示した可能性を窺わせよう。この類推は、I～IV型の解説で暗示した、B類型・B1類型の減少とA類型の増加が時間的傾斜を有している可能性に照射させても矛盾は無い。

「港北ニュータウン地域にあっては、口縁部文様帯を有する土器群が加曾利EⅢ式前半では主体をなすが、集落跡分布に大きな変化が起こる加曾利EⅢ式後半期には柄鏡形住居跡への転換を伴いつつ、土器群にあっても（吉井城山貝塚出土土器より新しい）口縁部文様帯を持たない一群への急激な傾斜があるらしい」（石井1994）、下総台地においても、加曾利EⅢ式期において、口縁部文様帯を有する土器群（キャリパー形土器）の主体的構成と減少化は認められるところである。今仮に、加曾利EⅢ式土器（古段階）／（新段階）という二つの枠組

みの中のみでのキャリパー形土器の構成比から導き出されている、主体的構成と減少化という傾向が、より具体的（詳細）な時間幅の傾斜の中にあっても、概ね減少化を示しているという前提が許容されるならば、この前提（構成比の変化）は集落復原に向けての有効な視点になり得る。この視点にすぎり、林台遺跡の各群の分析を行いたいが、幾つかの困難が待ち受けることとなる。それは、前述した、住居に遺棄された土器群は、住居の設営された時期を良好に反映しているものの、竪穴に廃棄された遺物は住居の設営された時期を良好には反映しないという点である。このような点を勘案すると、個々の住居跡の遺棄された土器群や廃棄された土器群相互を個別に比較する操作は、個々のサンプルの絶対数が少量になってしまい、多くのノイズを含むこととなり、大局的な傾向（各群での構成比の変化）を読みとれなくなってしまう。そこで、概ね土器の廃棄が居住に関わる場に廃棄され

住居	群	キャリパー形土器	横位連携弧線土器	意匠充填系土器
1	5	7.14	9.10.11.15.17.25	13.18.33.36
2	5		2	3.7
3	5		1.8	2
4	7	2.3.4		1
6	6		3	
7	6	1		8
8	6	1.2.3.4.6.7.8.24.27	5	9.13
9	6	1	4	
10	6	1.2	7.17.18	16
11	6			6.9
12	6			1.6
13	6		2.3	4
15	6		1	
16	6	6.12		2.7.8.9
17	6		6.7	5.11
18	6			2
20	3	1	10.8	5.6.7
21	3	4	2	3
23	3			1.2
25	3	3		2
30	3		1	
31	3	2	7	3
32	3	4	8	12
33	3		1	
36	2	1.3		
46	1	5	3	
49	2	2.4		5.6
50	4	2	3.5	4.7
52	4	1.2.5.6.10.11	9	3.8.15
53	4			1
55	4			6
57	4	2.3.4.5.10		
59	4	1		
61	4	3		
62	4		6	
63	4		3.4.5	
64	8		14	5
65	10	2		1
66	10	1.3.4.5		
67	10			1.3.4.12
68	10			3
70	10	1.2.3		6.7.8
72	10	1.2.4.5	3	

第 1 表

群	点数			比率%		
	キャリパー形土器	横位連携弧線文土器	意匠充填系土器	キャリパー形土器	横位連携弧線文土器	意匠充填系土器
1	1	1		0		
2	4	0		2		
3	5	7		9	24	33
4	14	7		7	50	25
5	2	9		7	11	50
6	15	11	16	36	26	38
7	3	0	1			
8	0	1	1			
9	0	0	0			
10	12	1	9	54	5	41

第 2 表

た”との前提に立脚し、各群での遺棄された土器群と廃棄された土器群を総体として扱うこととした。

第 1 表は報告書中で、住居跡毎に筆者が認識した、キャリパー形土器・横位連携弧線文土器・意匠充填系土器の遺物番号である。これらの点数を各群毎に集計し、構成比を示したものが第 2 表である（1・2・7・8・9 群については資料の絶対数が少ないので構成比は算出しなかった）。土器群の構成比を鳥瞰すると、キャリパー形土器が 11～54%、横位連携弧線文土器が 5～50%、意匠充填系土器が 25～43% を示し、相対的には意匠充填系土器の構成比が安定している。このことは、キャリパー形土器の増減が横位連携弧線文土器の増減に連動することを示し、キャリパー形土器のみの数字では推し測れない部分を、横位連携弧線文土器の示す数字が暗示する可能性をも示していると捉え得る。ともあれ、型としての分析の範疇に含めなかった 5 群を除いたところで、各群のキャリパー形土器の構成比に着目すると、4・10 群と 3・6 群の傾向の差異は明瞭であろう。更に、横位連携弧線文土器の構成比に着目したところでの 4 群と 10 群の傾向の差異も明瞭であろう。

以上、土器群の構成比に着目すると、概ね、10 群（I 型）→ 4 群（II 型）→ 3・6 群（III 型）という時間的傾斜の傾向を看取することができる。このことは、I～IV 型の解説で暗示した、B 類型・B 1 類型の減少と A 類型の増加が時間的傾斜を有している可能性に照射させても矛盾は無いと同時に、遺棄された土器群のなかでの 10 群の位置づけとも矛盾がない。

(5) 展望

林台遺跡の各住居跡群のなかでの各類型のあり方を概念化した I～IV の“型”、即ち、

I 型 B 1 類型を主体に B 類型が加わる構成を示すもの ～ 10 群

II 型 B 類型・B 1 類型と A 類型がほぼ等しい構成を示すもの ～ 4 群

III 型 A 類型を主体に B 1 類型が一軒加わる構成を示すもの ～ 1・3・6 群

IV 型 A 類型のみによって構成されるもの ～ 2 群

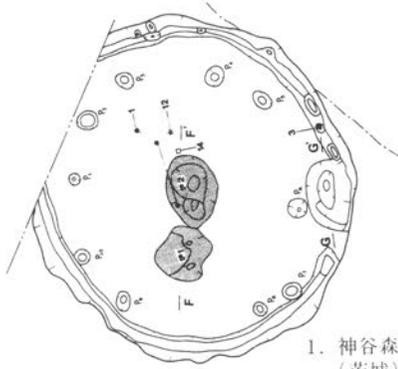
は、そのまま林台遺跡の I 期・II 期・III 期・IV 期として捉えることができよう。しかしこの各期の設定は、林台遺跡に居住していた固定的な単位集団の連綿とした歴史の解明などでは決し

てなく、“手賀沼に注ぐ大津川に面し、北東向きに突き出た舌状台地の奥まったエリア”に断続的に繰り広げられた、あらゆる単位集団の居住の痕跡の復原と、各単位集団の社会的評価にある。

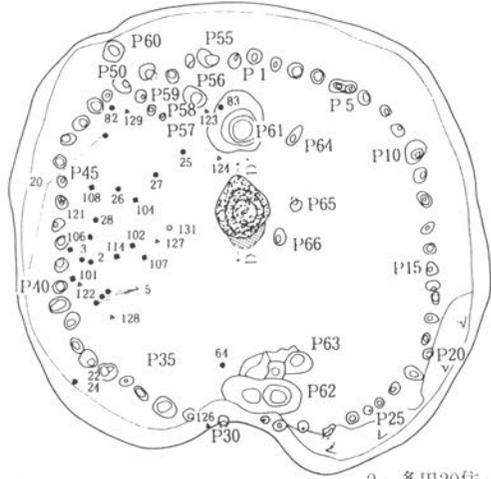
各期・各単位集団の評価については、それぞれの型の解説中に述べているので繰り返さないが、概ね加曾利E III式土器（古段階）という時間幅のなかで、概ね4期にも及ぶ景観を復原し得た。しかし、例えばIII型（III期）の1・3・6群が同時に存在しない可能性も当然指摘されてしかるべきであろうし、更に1・3・6群内での動的な景観の予想や、IV型（IV期）での累積の可能性を勘案すれば、より一層複雑な景観が繰り広げられていた可能性をも指摘し得よう。このように考えると、たかだか“手賀沼に注ぐ大津川に面し、北東向きに突き出た舌状台地の奥まったエリア”においてすら、加曾利E III式土器（古段階）という具体的な時間幅の中にあってさえ、複雑な“時間的展開”が繰り広げられており、この時間的位相のなかで単位集団の内包する“社会的展開”が繰り広げられており、下総台地で今日までに蓄積された多くの調査成果を勘案すると、加曾利E III式土器（古段階）という具体的な時間幅を対象を限定したところでも、社会変遷史の解明に関して、我々にいかに多くの命題が課されているかが痛感されよう。

ともあれ、筆者が林台遺跡の復原に向けて行った分析方法の当否は、今後の他遺跡での分析を積み重ねて行くことのなかから評価されるものと思う。無論、炉跡・壁高・柱穴深度の解釈、建て替え・硬化床面・支柱穴の評価や、土器群の構成比の評価には多くの異論が提出されることも予想されるが、報告書に記された考古学的事象の尊重という立場を遵守し、概ね各解釈・評価が大きく矛盾することなく相互に説明されている点にいくばくかでも注目していただければ、叩き台としての役目は果たし得たかと思う。

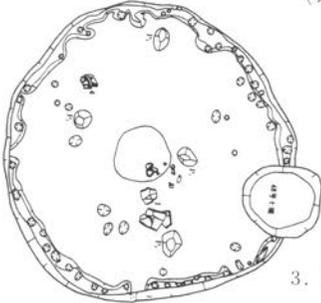
最後に、まさに叩き台として、注目すべき当該期の住居跡を示しておきたい（第7・8図）。これらは全て沓関東的に観ても類例に乏しく、下総台地の前段階においてさえも類例に欠ける住居跡である。注意を喚起するという意味あいから、簡単な集成を行ったところである。林台遺跡では、複構造の炉跡を有する住居跡が3軒（20・50・52号住居跡）確認された（第7図4・6）が、このような複構造の炉跡は先述のように、住居跡の建て替えに依るものではない。このような住居跡は少数ながら、茨城県神谷森遺跡（第7図1 小泉1991）や、当センターで現在整理中の市原市武士遺跡（第8図2）でも検出されている。注目すべきは、武士遺跡例で、複構造の一方の炉跡壁面に斜位に土器が埋設されている点であり、このような炉跡は、未報告ながら酒々井町墨木戸遺跡（（財）印旛郡市文化財センター1991）でも検出されている。「円形を基調とした掘り込みの炉跡の周縁に、土器を斜めに埋設した炉跡が検出されている。東北地方の複式炉の系統とも考えられるが、系統、機能等は今後の課題である」とされ、写真



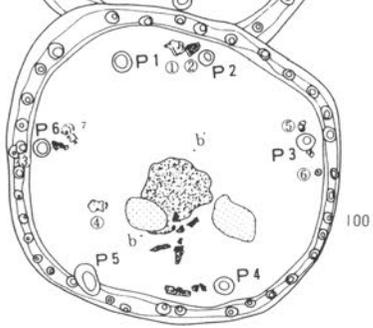
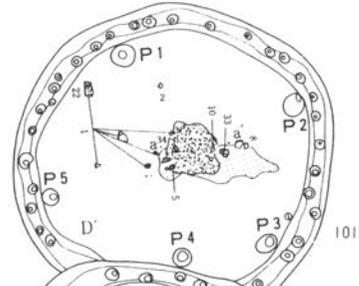
1. 神谷森47住
(茨城)



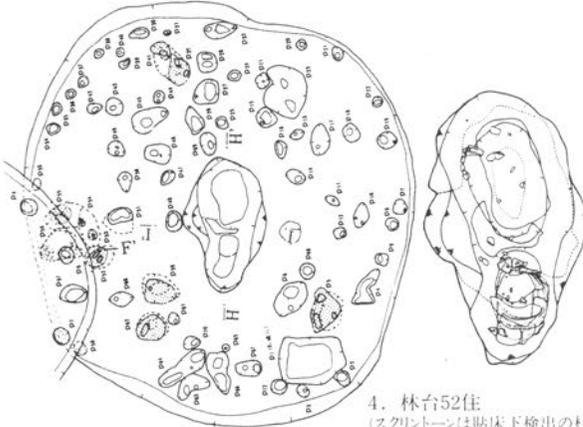
2. 多田20住



3. 芳賀輪50住



5. 長田雄子ヶ原100・101住



4. 林台52住
(スクリーンは貼床下検出の柱穴)

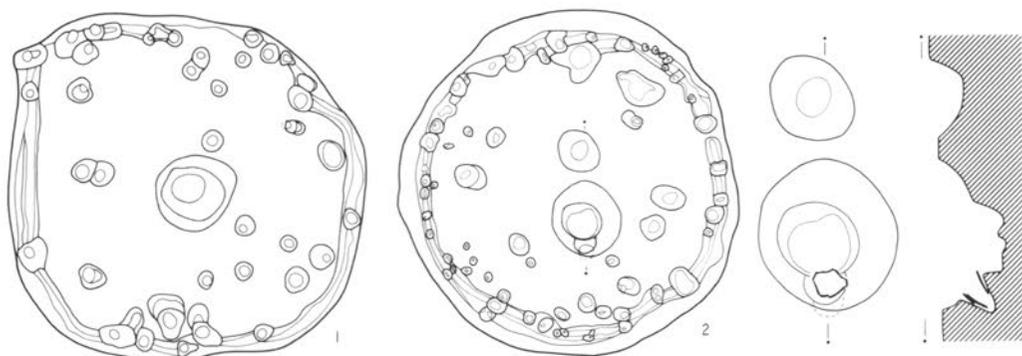


6. 林台20住



7. 芳賀輪14住

第7図 中期後半の異質な住居跡例 (S=1/100)



第8図 武士遺跡における類似例 (S=1/100)

が掲載されている。炉の掘り込み自体は一基であるものの、武士遺跡例と共に壁面への土器の斜位埋設例として注目に値する。この他、壁溝や壁柱穴のような柱穴群を有する住居跡(第7図3・5・7 田中1984 倉田1988 喜多1989)、(第8図1)も当該期での類例に乏しく注目に値し、壁柱穴のような柱穴群を有する住居跡で、主柱穴が奥壁部と入り口部の3本によって構成される可能性の高い住居跡(第7図2 上守1992)も極めて異質な存在として注目してゆかなければならない。これら異質な特徴を有する住居跡、即ち、複構造の炉跡を有する・炉跡壁面に土器を斜位に埋設する・壁柱穴のような柱穴群を有する・3本の主柱穴構成を有する、という特徴は、繰り返しになるが、汎関東的に観ても類例に乏しく、下総台地の前段階においてさえも類例に欠けるもので、筆者が抽出した二階層性とは別個の位相で捉えなければならぬものである可能性が強く、今後の調査例の増加のなかで、更には集落分析のなかで注目しておかなければならない住居跡であろう。

4. おわりに

本稿では、加曾利E III式期(古段階)を中心とする時期の抱える問題点のうち、土器論上の問題点と、集落論上の問題点について考察を加えてみた。前半の土器論上の問題については、加曾利E III式期の成立段階の認識についての考察と、加曾利E III式期(古段階)という時間幅の設定に関わる問題点を中心に論述し、共通認識の形成に向けての叩き台としての責務は、県内の当該期土器群の集成も含めたところで果たし得たと思われる。後半の集落論上の問題点については、林台遺跡の分析を通して、加曾利E III式期(古段階)の社会の複雑な様相を提示し、方法論をも含めたところで、これまた叩き台としての責務は果たし得たかと思われる。諸氏の御批判・御教示を仰ぐと共に、本稿が当該期研究の進展に向けて、幾ばくかの貢献が果たせるならば望外の喜びである。

最後に、今回、林台遺跡を分析の対象として扱わせていただいたが、林台遺跡を選択した理由は、比較的広大な面積の調査が為され、且つ限定された時間幅におさまる多くの住居跡が検出されており、遺跡（集落）の全体的な様相が反映されているであろうとの予測からであった。実際の分析成果は筆者にとって納得のいくものであったが、何よりも、報告書に記された考古学的事象の尊重という立場を遵守しつつ、炉跡・壁高・柱穴深度の解釈、建て替え・硬化床面・支柱穴の評価、土器群の構成比の評価を行う際、報告書中に盛り込まれた、発掘調査段階や整理作業段階での遺漏なき事実記載とフラットな視点での観察方法は、分析を進めるにあたって極めて有効であった。発掘調査から整理作業に関わった調査員の方々の、資料提供者としての真摯な姿勢は、同じく資料提供を生業とする筆者にとって、多々見習うべき点があった。文末ながら敬意の念を表させていただきます。

本稿を草するにあたって、下記の諸氏には多くの御教示を賜った。末筆ながら御芳名を記し感謝の意とさせていただきます。（五十音順 敬称略）

秋田かな子 石井寛 稲村晃嗣 江原英 大塚達朗 押山雄三 上守秀明 菅谷通保
鈴木徳雄 中野修秀 西野雅人 平林彰 四柳隆 綿田弘実

註

- (1) 横位連携弧線文土器が、対向系横位連携弧線文土器（第16図14）と入組系横位連携弧線文土器（第13図9）に分類され、成立過程にも微細な差異が存在する可能性を指摘した（加納1994）が、成立の微妙な時間的差異は指摘し得なかった。厳密には「入組系横位連携弧線文土器萌芽段階」の土器群として将塚塚例・古井戸例を抽出したが（加納1994 13頁）、これらは論理の変遷過程から抽出した型式学的な萌芽段階の土器群であって、時間的に確実に先行する確証は現段階では無い。よって本稿でもこれら両者を含めた広義の横位連携弧線文土器の成立をもって、暫定的に加曾利E III式土器の成立と捉えておく。
- (2) この5点の様相の差異についての論理的な裏付けについては、従来より頭を悩ませていたが、鈴木徳雄氏は「加曾利E式後半の形制と施文域の変化」の論理的編成のなかから、極めて明快にこのあたりの事情を解き明かしている（鈴木1994）ので参照されたい。
- (3) 第9図～第20図は、加曾利E II式から加曾利E III式期にかけての主要な土器群を、一括資料を主眼に掲載してある。下総台地の遺跡の様相を示す目的に加え、県内資料の集成的意味あいも込めており、（加納1989b）（加納1994）と併せれば、県内の加曾利E式後半期土器群の大半は網羅している。縮尺は1/10で統一してある。
- (4) この土器の評価については旧稿（加納1994）中で述べたが、繰り返すならば、複沈線による弧線文風意匠を相互に連携させることなく器面に充填し、図/地の対照効果に欠けることから、意匠充填系土器系の対向系横位連携弧線文土器ともいえる土器であろう。
- (5) 旧稿（加納1994）においても触れているが、第11図15は独立して充填された紡錘状の意匠を抱えるように、単沈線の弧線文が配される。この弧線文は相互に連携しないものの、横位に規則的に配され、相互の連携を意

図するが如く末端を横位に解放している。但し、この末端の解放は、横位の連携の意図としての評価と同時に、キャリパー形土器の蕨手状の懸垂文との関連のなかで捉え得るものであるのかもしれない。ともあれ、図/地の対照効果に乏しく、施文域下半では図/地効果に混乱が認められる。横位連携弧線文土器の影響を受けた意匠充填系土器であろう。第12図2は、入組系横位連携弧線文土器に類似するが、懸垂文が入り組むのではなく、弧線文の横位の連携に取り込まれ、この懸垂文は当然末端を解放していることから、弧線文相互の横位の連携は、結果的に遮断されることとなる。

- (6) 旧稿(加納1994)中でも触れているが、例えば第16図3は、意匠充填系土器に一般的な(=横位連携弧線文土器に起源を求め得ない)渦巻文を横位に連携させるものの、この横位の連携内に更に渦巻文を充填させているが、この充填された渦巻文が更なる横位への連携をも窺わせている。図/地効果に一部混乱が認められ、括れ部の横位の衝突は意匠充填効果を際立たせるために獲得されているとも理解され、概ね意匠充填系土器をベースにした横位連携弧線文土器との接触・融合を示す個体であろう。
- (7) 下総台地の当該期土器群の系統的構成比の分析に際しては、他地域との対比が当然必要となる。例えば本稿でも、横位連携弧線文土器の構成比に関し云々しているが、他地域との比較に於いて、下総台地での加曾利E III式期(古段階)における横位連携弧線文土器の構成比が、概ね低いという傾向が、感覚的ながら指摘することができ、このような大局的な差異から、今回は構成比の問題を客観的な基準を以て解き明かせないでいる。今後の課題としておくと共に、下総台地内での地域性、例えば、東葛地域と印旛沼以東の地域、更には上総地域での差異も今後の課題としておきたい。
- (8) 遺跡毎の系統的構成比の差異については、加曾利E III式期(古段階)の土器群の錯綜する様相から推し測るならば、各遺跡(集落)の設営時期の微妙な差異によっても構成比に差異が現れてくる可能性もあろうし、集落を構成する人員の出自の差異の反映である可能性や、集落の立地する台地の有する離合集散の結節点としての性格(レベル)の差異、即ち人が集まりやすいか否かという問題とも関わってくるであろう。
- (9) 例えば、31・46・64号住居跡出土土器群は、他の住居跡出土土器群に比べ、若干新相を呈するようなニュアンスを受ける。しかし、この、31・46・64号住居跡出土土器群を積極的に、筆者の加曾利E III式土器(新段階)や、埼玉編年の加曾利E IV式土器として捉えるには、感覚的に躊躇をおぼえると同時に、明確な論拠も見あたらない。やはり、筆者の加曾利E III式土器(古段階)、埼玉編年での加曾利E III式土器との評価が妥当であろうと思われる。また、意匠充填系土器萌芽段階のキャリパー形土器を出土する住居跡、即ち52号住居跡については、前述の通り、未確定な要素は多いものの、一括資料での対向系横位連携弧線文土器の伴出から、暫定的に加曾利E III式期(古段階)と捉えることに差し支えはなかろうし、67号住居跡については、詳細は後述するが、52号住居跡出土土器群を視座に据えたところで、やはり“概ね横位連携弧線文土器が成立しているであろう段階=加曾利E III式期古段階”としての位置づけは、積極的に否定し得ないであろう。
- (10) 例えば、多田遺跡(上守1992)や長田雉子ヶ原遺跡(喜多1989)等で顕著な、明瞭に壁の掘り込みを認識・検出し得ない、柱穴のみの住居跡の数多くの存在も、このあたりの状況をよく物語っているものといえよう。
- (11) 便宜的に、概ね一軒の住居跡で示されるところを居住単位とし、概ねひとつの集落や、集落内での居住の場の共有で示されるところを単位集団として捉えておくこととし、特別な意味を付さないでおく。
- (12) 相対的に低い壁高・浅い柱穴を有する住居跡の急激な量的増加は、加曾利E III式土器(古段階)という共時性を軸に据えれば、加曾利E II式期での少数的存在を認めたところでの、伝統の差異として捉え得る可能性も存在するであろうが、急激な量的増加が捉えられている以上、加曾利E II式期の一般的なしっかりとした住居

跡から時間的傾斜を以て変異した可能性や、突発的に生成した可能性も追求してゆかなければならないであろう。

- (13) 両者の機能していた具体的時間幅の差異であると同時に、可能性としては、灰・焼土の掻き出しの有無や、炉体土器の有無からくる差異や、今日的には推し量れない構造的差異・使用方法の差異が存在したかもしれないが、第一義的には両者の機能していた具体的時間幅の差異であろう。
- (14) 受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有する住居跡全てが、壁高・柱穴深度において卓越しているわけではない。第3図の散布図に明らかなように、1・46・59・67・68号住居跡等は、受熱による焼土層の形成が顕著な炉跡を有する住居跡であるにも関わらず、壁高・柱穴深度において卓越しているわけではなく、むしろ炉跡の明瞭でない住居跡の散布に比して、概ね壁高において劣るという散布傾向(まとまり)を有しており、壁高・柱穴深度の卓越する一群とは峻別され、別個の類型的な把握が為される可能性も有している。将来的にはこの問題も問われるべきであろうが、同時に壁高が我々の調査時の諸要因に左右されることも留意しておかなければならない。些末な指摘ではあるが、重機による表土除去の技術的な質が、遺跡の諸要素、例えば平坦面・緩斜面・遺物散布の粗密等の差異を乗り越えたところで、均質に為されている保証は無いし、我々のプラン確認の際、覆土中の遺物の包含が少量でプランがしみ状を呈し不鮮明であるケースでは、更に掘り下げての確認が為されることも日常的であり、概して柱穴深度・炉跡の様相に比して、壁高には今日的な不確実な要因が多く含まれており留意しなければならない。
- (15) 該当する住居跡は下記の通りである。
1～3・5・6・16・17・20～22・28・31・34～38・40～43・45・46・49～58・60・61・64～72
- (16) 該当する住居跡は下記の通りである。
1・4・5・15・20・46・49・50～57・59・60・64～66・68・69・70・72
- (17) 石井氏の加曾利EⅡ/Ⅲ式期を挟んだところでの大局的な集落の存在形態の差異の概念化については、(鈴木1986)での分析が大いに参考となった。
- (18) 報告書において、埋甕・炉体土器の指示が明瞭でないものが散見された。これらについては遺構実測図中の出土状況図や写真から類推し、本稿で取り上げている。当該土器にはキャプションの末尾に疑問符を付しておいた。

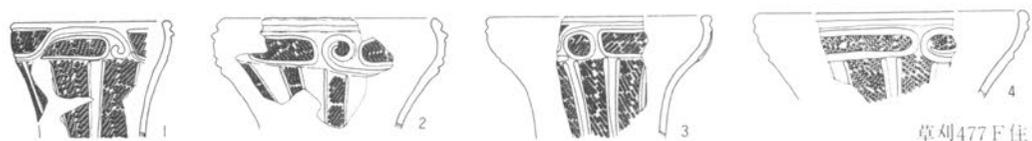
引用・参考文献

- 青木幸一 1989『馬洗城址発掘調査報告書』大栄町教育委員会
- 青木美代子他 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 青沼道文 1990「千葉市域の縄文中期後半期遺跡の分布と立地」『貝塚博物館紀要』第17号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 赤山容三 1993「1992年の縄文時代学界動向 遺構論」『縄文時代』第4号 縄文時代文化研究会
- 浅川裕之 1987『昭和61年度市川東部遺跡群発掘調査報告』市川市教育委員会
- 新井和之 1979『土宇』日本文化財研究所
- 石井寛 1977「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井寛 1984「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』第5冊港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

- 石井寛 1989「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』第6冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井寛 1990『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター
- 石井寛 1993『牛ヶ谷遺跡 華蔵台南遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井寛 1994「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』第五号 縄文時代文化研究会
- 石坂茂他 1988「加曾利E式土器に関する一考察」『群馬県の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則 1986『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 稲田孝司 1972「縄文式土器文様発達史・素描(上)」『考古学研究』第18巻第4号 考古学研究会
- 稲村晃嗣 1990「加曾利E式系列の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 稲村晃嗣 1994「両耳壺の研究ノート」『民族考古－大学院論集－』第2号 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
- 井上文男 1989『林台遺跡』柏市教育委員会
- 今泉潔 1986『千葉市中籬遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 大原正義 1989『佐倉市向原遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 岡田光広 1986『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書』II(財)千葉県文化財センター
- 奥田正彦 1983『主要地方道成田松尾線』I(財)千葉県文化財センター
- 小久貫隆史 1989『林北遺跡・長山遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 押山雄三 1988「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要』第5号 郡山市教育委員会
- 折原繁 1976『千葉市中野僧御堂遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 加納実 1989a『小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 加納実 1989b「千葉県における加曾利E式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 加納実 1994「加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 上守秀明 1990『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書』III(財)千葉県文化財センター
- 上守秀明 1992『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書』VII(財)千葉県文化財センター
- 上守秀明 1993『千葉東南部ニュータウン18』(財)千葉県文化財センター
- 木川邦夫 1990『成田市都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』成田市教育委員会
- 喜多圭介 1989『長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 桑原護 1974『飯重』佐倉市教育委員会
- 桑原護 1981『埋田遺跡』沼南町教育委員会
- 倉田芳郎 1988『千葉市芳賀輪遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
- 小泉光正 1991『一般県道土浦若井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』(財)茨城県教育財団
- (財)印旛郡市文化財センター1991『(財)印旛郡市文化財センター年報7』
- 齊藤忠昭 1988『昭和62年度市川東部遺跡群発掘調査報告』市川市教育委員会
- 笹森健一 1989『上手遺跡発掘調査報告書』北本市上手遺跡調査会
- 渋谷興平 1987『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 菅谷通保 1985「竪穴住居の型式学的研究」『奈和』23 奈和同人
- 鈴木徳雄 1986『橋ノ入遺跡』II 児玉町教育委員会

- 鈴木徳雄 1991「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 1994「称名寺式の形制と施文域」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査委員会
- 鈴木徳雄 1994「敷石住居跡の連結部石囲施設」『群馬考古学手帳』Vol.4 群馬県土器観会
- 高田博 1986『草刈遺跡（B区）』（財）千葉県文化財センター
- 田中英世 1984『千葉市芳賀輪遺跡』千葉市教育委員会
- 田村言行 1979『江原台第1遺跡発掘調査報告』4 佐倉市教育委員会
- 津田芳男 1990『桂遺跡群発掘報告書』（財）長生郡市文化財センター
- 戸田哲也 1986「縄文土器の型式学的研究と編年（前篇）」『神奈川考古』第22号 神奈川考古同人会
- 花輪宏 1984『昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告』市川市教育委員会
- 橋本勉 1991『向山遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 堀越正行 1984「加曾利EⅢ式土器断想」『史館』第17号 史館同人
- 松戸市教育委員会 1978『子和清水貝塚』
- 松戸市教育委員会 1985『子和清水貝塚』
- 宮井英一 1989『古井戸－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山口直人 1989『宮台遺跡』（財）山武郡南部地区文化財センター
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990『全遺跡調査概要』

(財団法人千葉県文化財センター市原調査事務所)

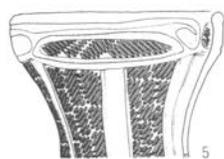


草刈477 B 住

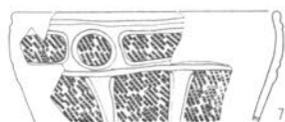
草刈796 土

草刈602 土

草刈477 F 住



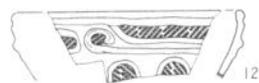
5.6 草刈177 D 住



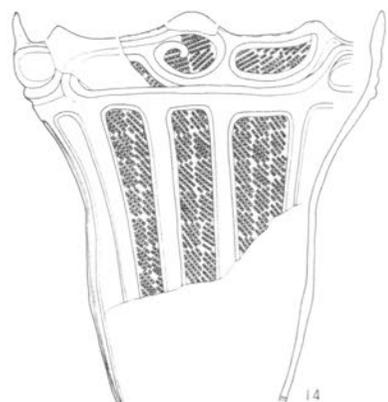
7~9 草刈187 G 住



10.11 草刈217 A 住



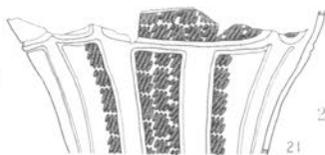
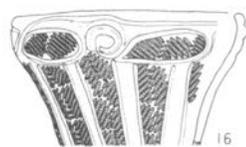
12.13 草刈301 住



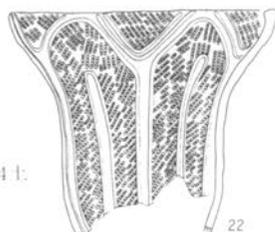
14~16 草刈245 A 住



17~19 草刈209 F 住

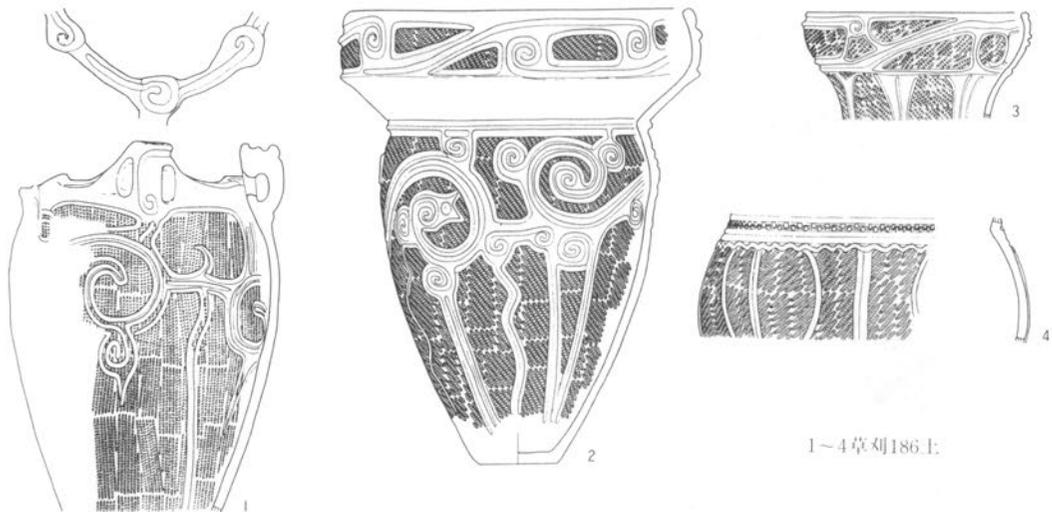


20.21 草刈664 土

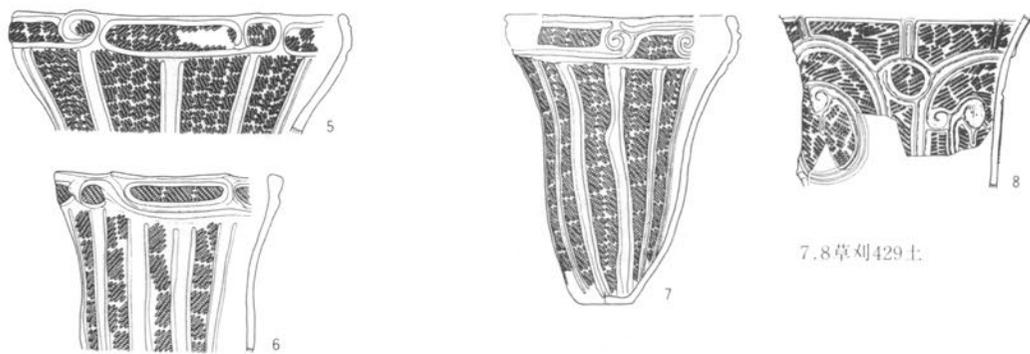


22.23 草刈431 土

第9図 千葉県内出土中期後半土器群(1) S=1/10



1~4草刈186土



7.8草刈429土

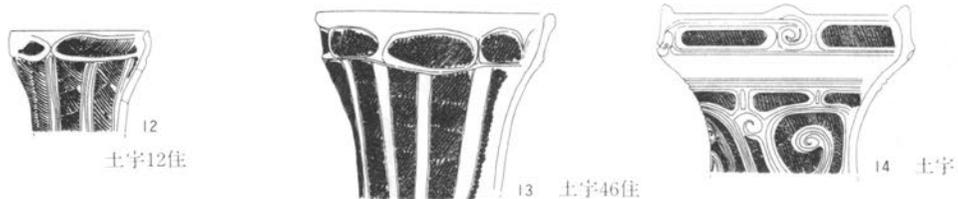
5.6草刈258C土



土字49住

土字42住

土字27土

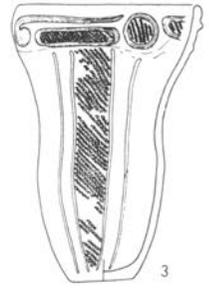
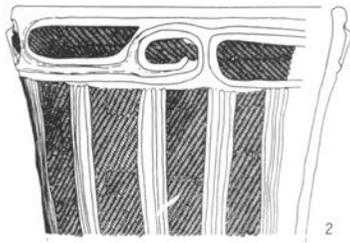
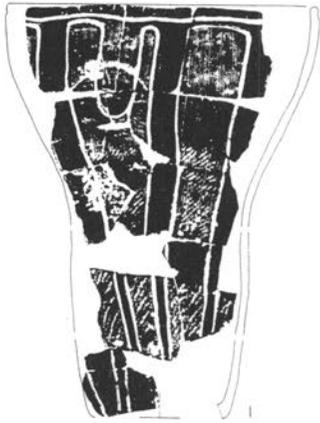


土字12住

土字46住

土字

第10図 千葉県内出土中期後半土器群(2) S=1/10



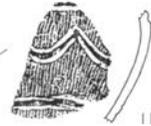
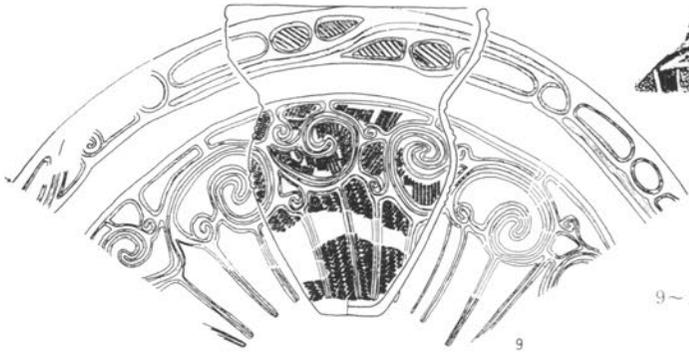
1.2土宇21土

子和清水1 27住

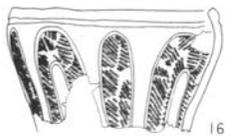
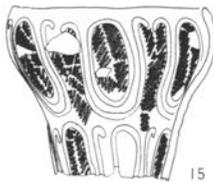
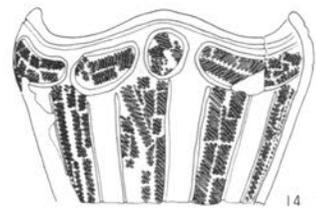
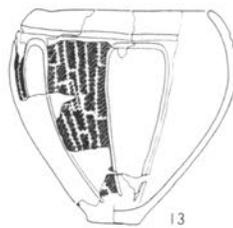
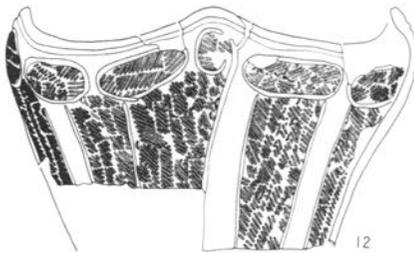


4~7子和清水1 157住

子和清水1 68住

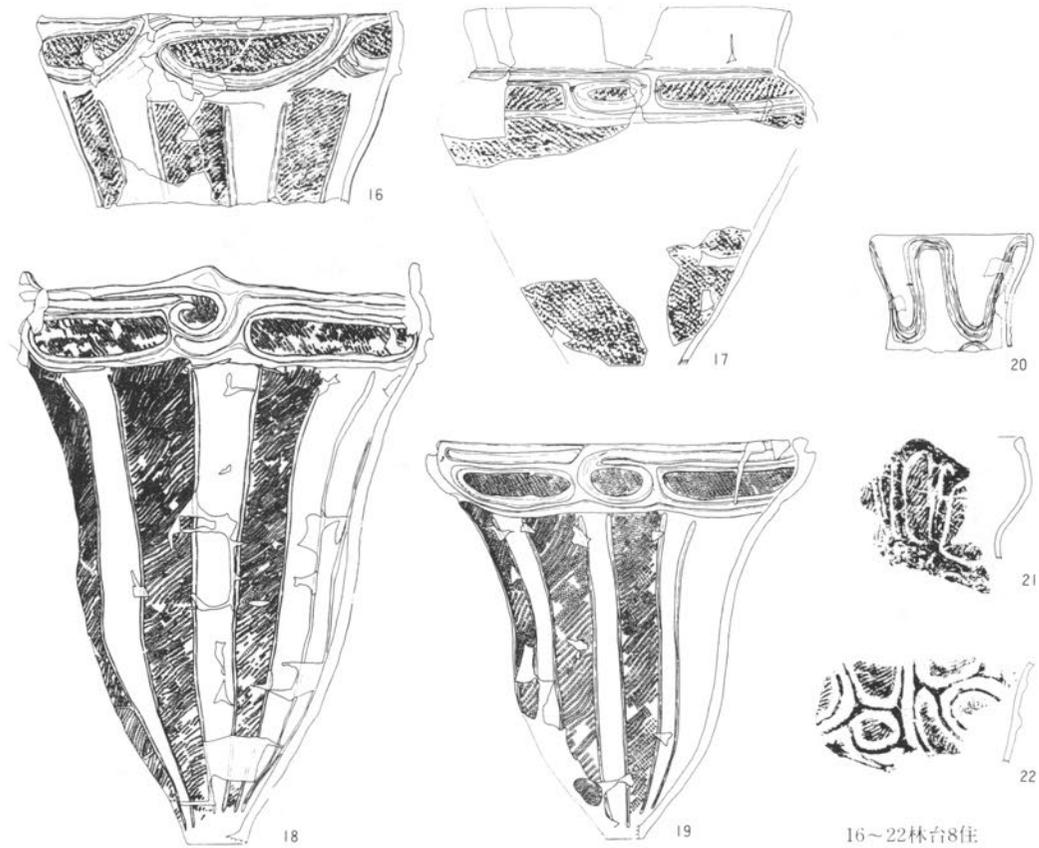
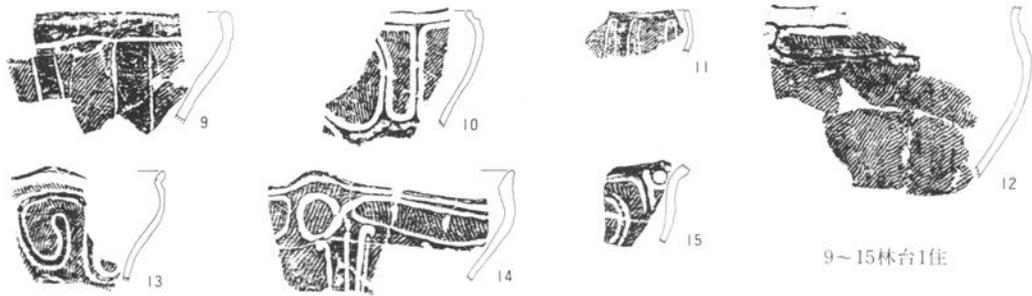
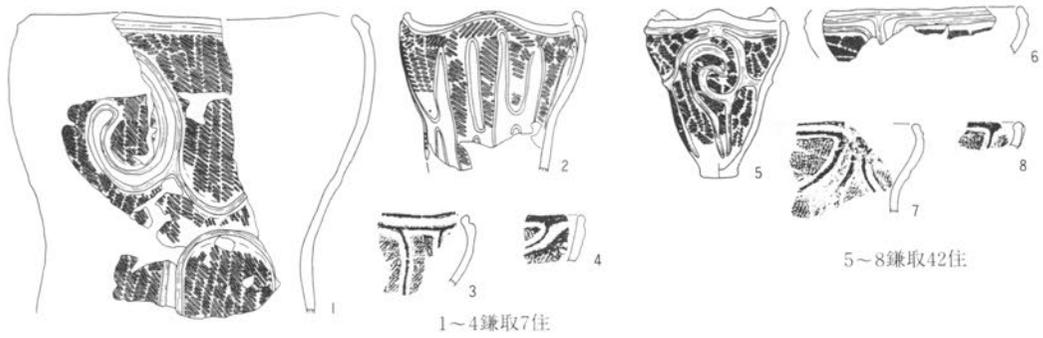


9~11子和清水2 876土



12~19鎌取4住

第11図 千葉県内出土中期後半土器群(3) S=1/10



第12図 千葉県内出土中期後半土器群(4) S=1/10

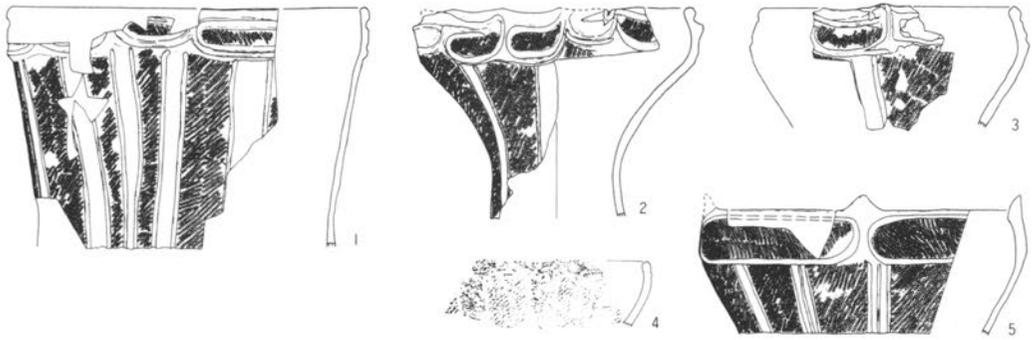


6.7林台67住

1~5林台4住

8~12林台52住

第13図 千葉県内出土中期後半土器群(5) S=1/10

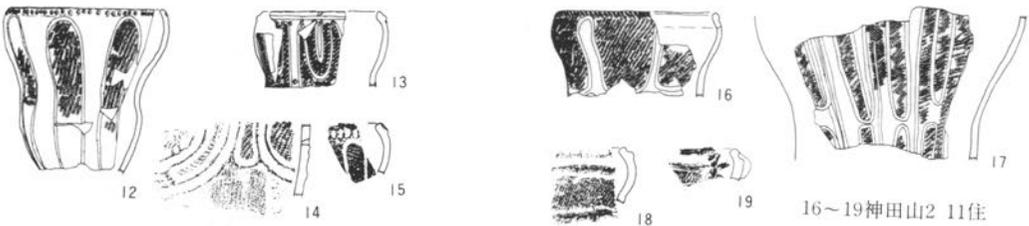


1~5神田山1 2住



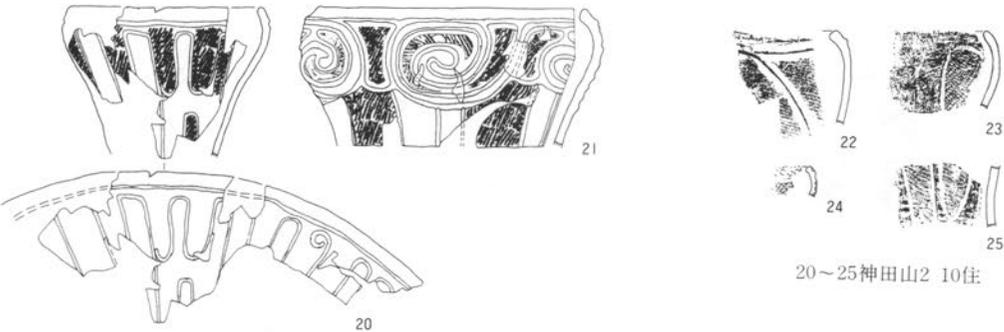
6.7神田山2 1住

8~11神田山2 7住

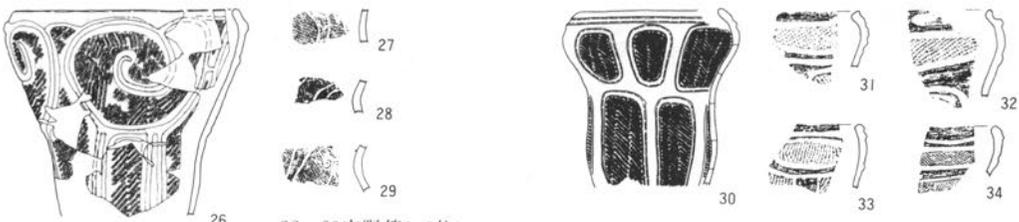


12~15神田山2 8住

16~19神田山2 11住



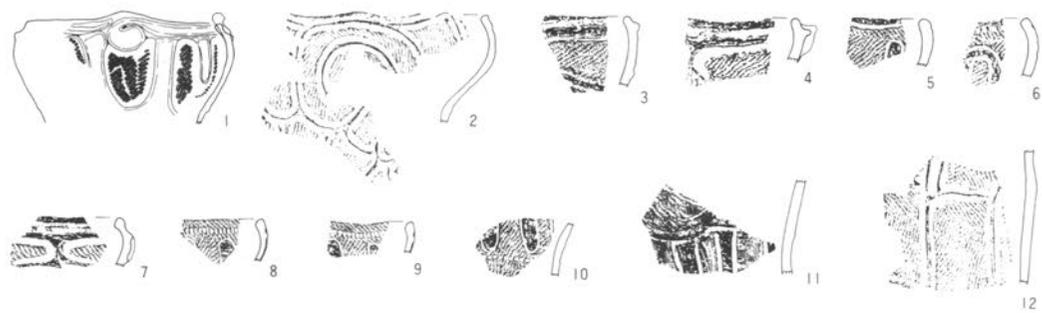
20~25神田山2 10住



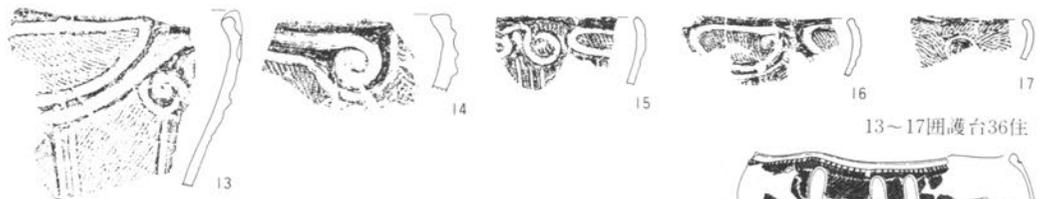
26~29内野第1 3住

30~34囲護台4住

第14図 千葉県内出土中期後半土器群(6) S=1/10



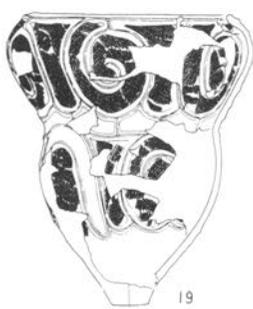
1~12 開護台32住



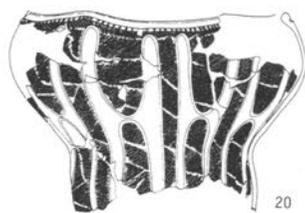
13~17 開護台36住



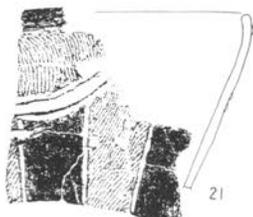
多田210土



多田225土

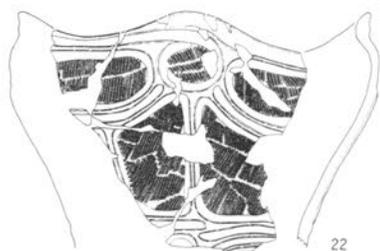


20



21

20, 21 多田1住



22



23



24

22~24 多田6住



25



26



27



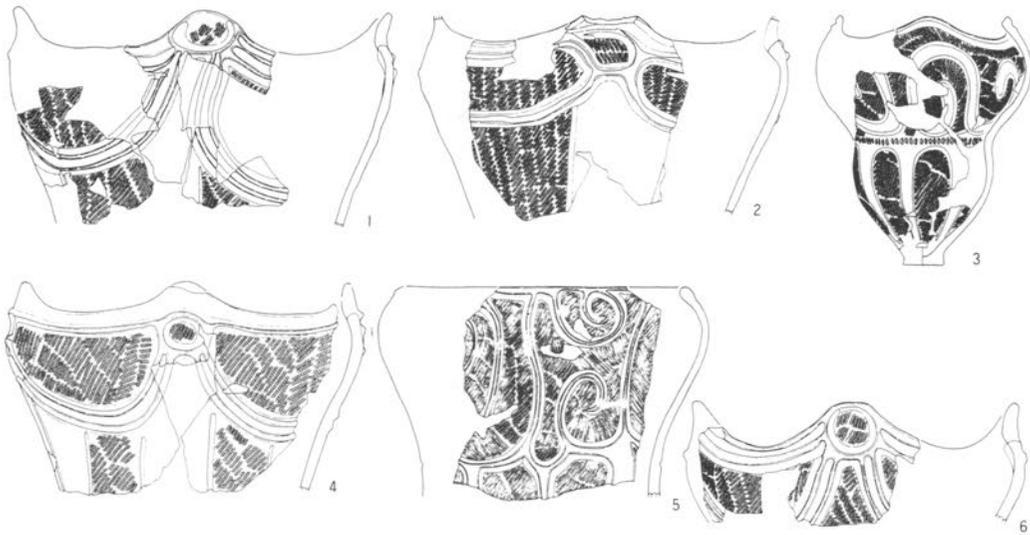
28



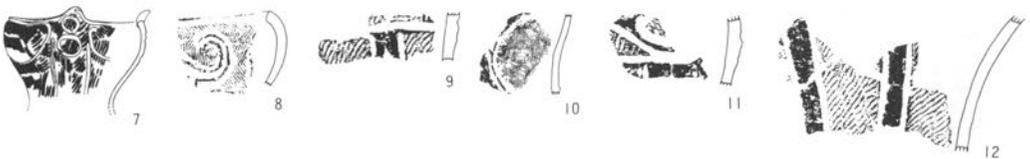
29

25~29 多田9住

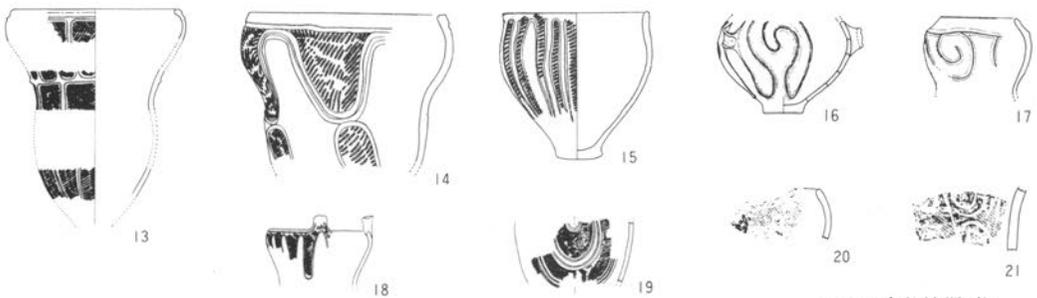
第15図 千葉県内出土中期後半土器群(7) S=1/10



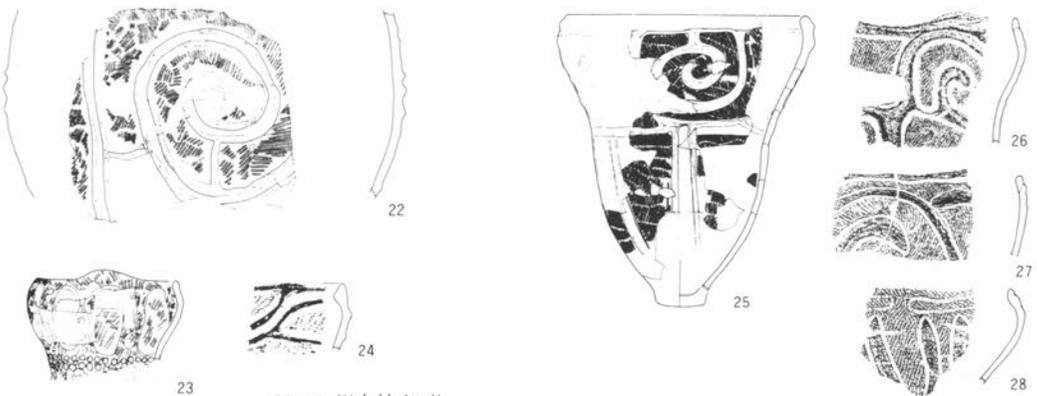
1~6 多田20住



7~12 生谷境堀8住



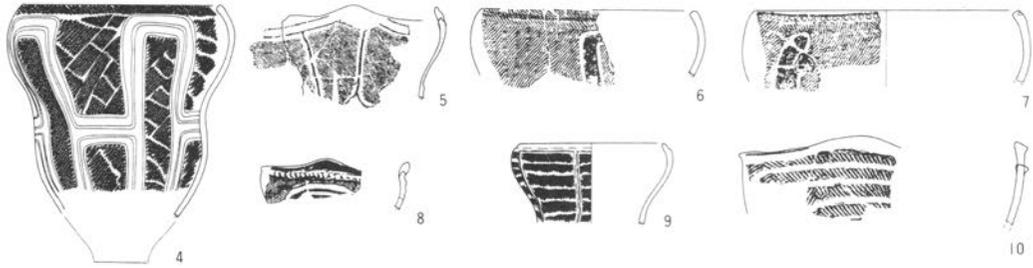
13~21 生谷境堀9住



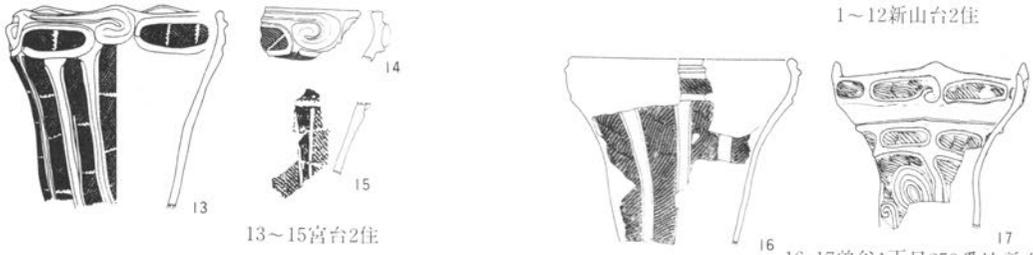
22~24 根之神台1住

25~28 中薙3住

第16図 千葉県内出土中期後半土器群(8) S=1/10

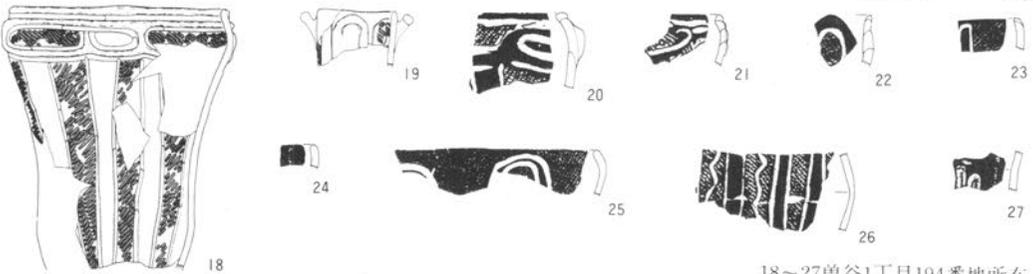


1~12新山台2住

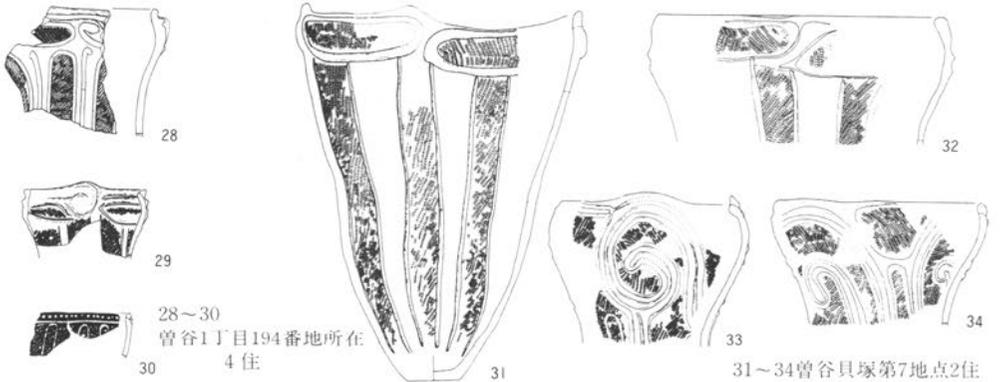


13~15宮台2住

16.17曾谷1丁目259番地所在
第2地点 3住



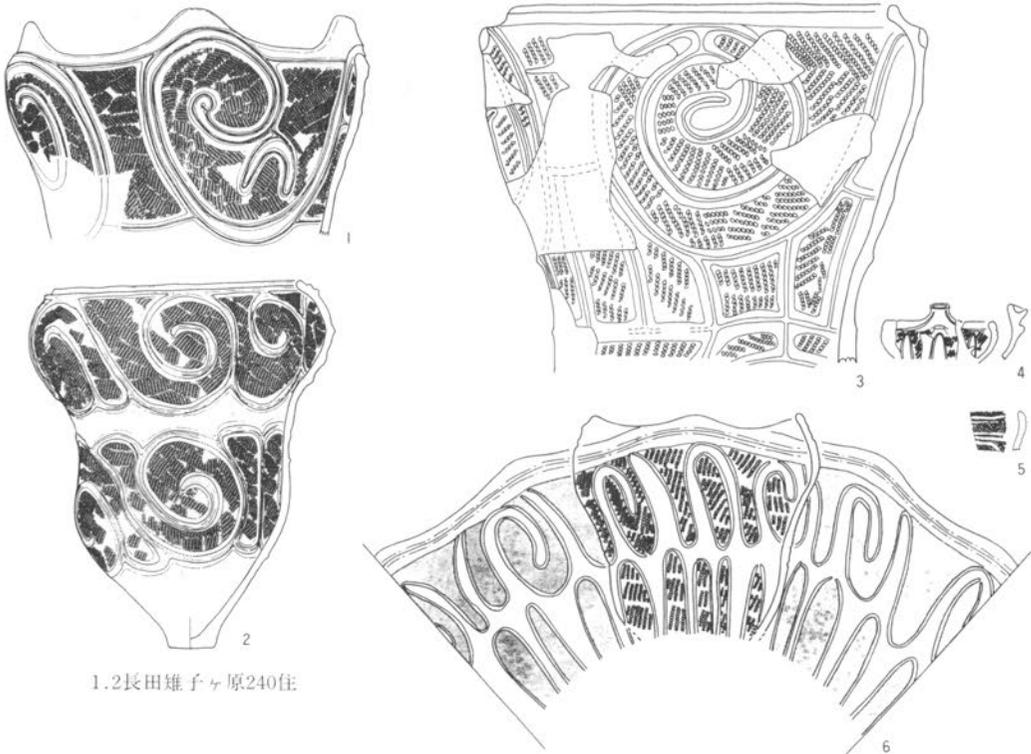
18~27曾谷1丁目194番地所在
6住



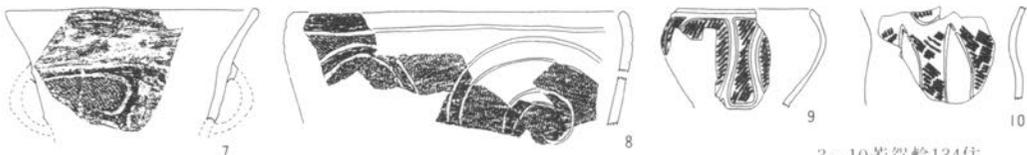
28~30
曾谷1丁目194番地所在
4住

31~34曾谷貝塚第7地点2住

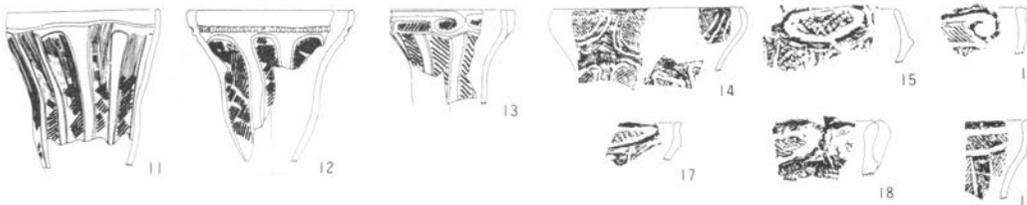
第17図 千葉県内出土中期後半土器群(9) S=1/10



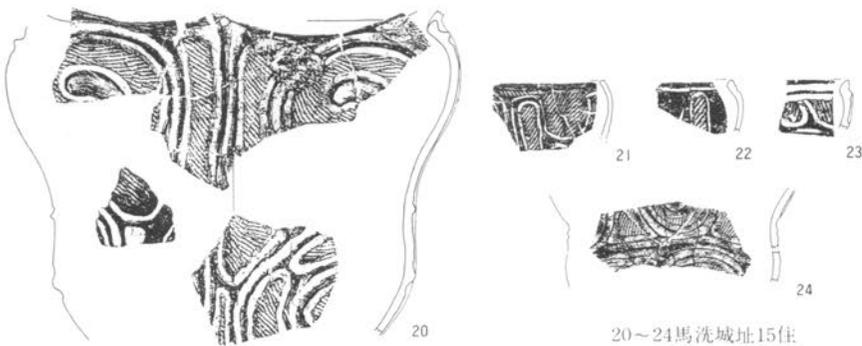
1.2長田雄子ヶ原240住



3~10芳賀輪134住



11~19芳賀輪50住

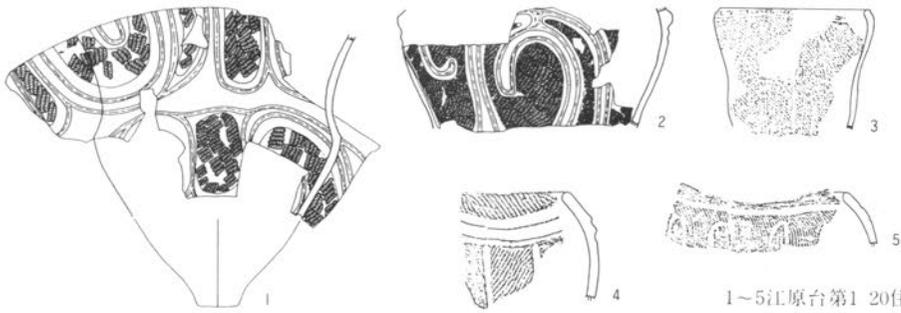


20~24馬洗城址15住

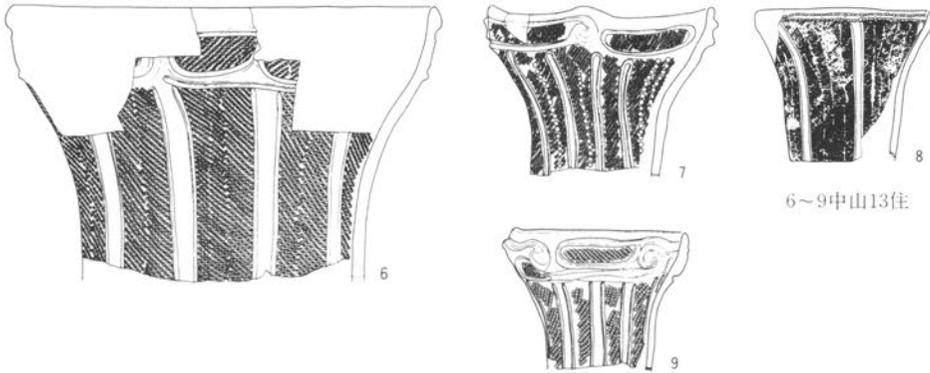
第18図 千葉県内出土中期後半土器群(10) S=1/10



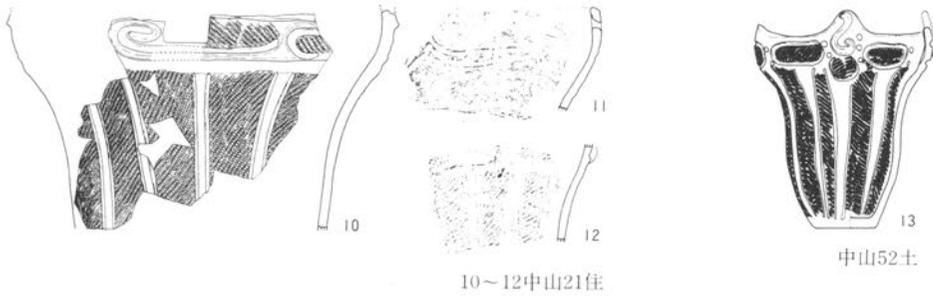
第19図 千葉県内出土中期後半土器群(II) S=1/10



1~5江原台第1 20住

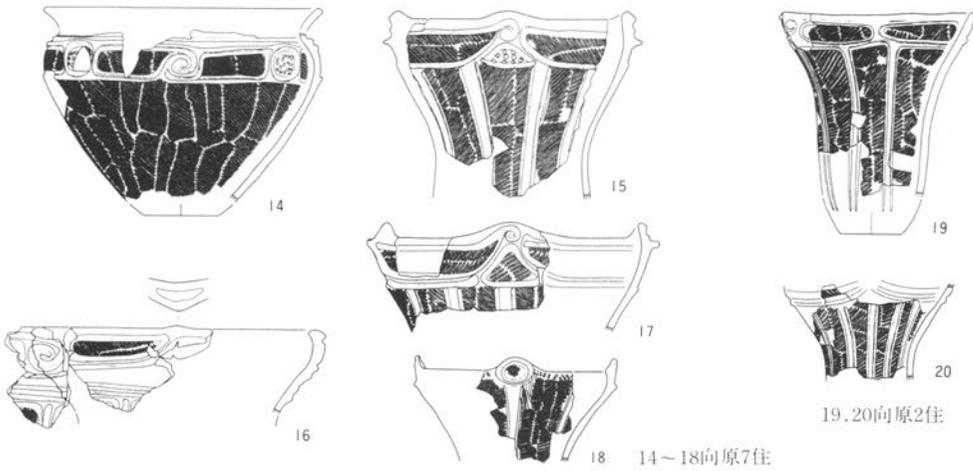


6~9中山13住



10~12中山21住

中山52土



19.20向原2住

14~18向原7住

第20図 千葉県内出土中期後半土器群(12) S=1/10